こてぃすと　～煌きの調べ～

都々古 さぴ

今年も残すところ一ヶ月とわずか。

直に年の瀬ムードも高まるのかと思うと、この一年を回顧する機会となる。

ここ三､四年はとりわけ重大事件や事故にも巻き込まれず､平穏無事にかつ健康的に過ごせていた。

あまりにも平和すぎてたまに身近に珍事件でも起こらないかと、ふと妄想することもあるが平々凡々な毎日が一番である。それは「こてぃすと」修行を経験して実感したことだった。

「こてぃすと」それは箏(こと)を駆使する人を指す。

お正月番組や小粋な和食店で一度は耳にしたことがあるだろう。安らぎや癒しの音色とイメージされている桐でできた弦楽器だ。

大きさは六尺八寸――即ち長さ約一八二ｃｍ、幅約二十四ｃｍ。

一三本の絃が張られており、自分から一番遠い絃より順に一、二、三と数えゆき、十一番目は斗(と)、十二番目は為(い)、十三番目は巾(きん)と呼ぶ。

右手の親指、人差し指、中指の三本の指の腹側に象牙製の「爪」をはめて弾く。

私は大学時代に部活で箏に触れたのをきっかけに、顧問の先生のお箏教室にも通い始めた。

更なる上達を目指し大学卒業後も月に二、三回はお稽古に通い、昨年には箏講師の資格、つまり指導できる資格も取得した。

「こてぃすと」というのは、箏奏者と同じように演奏会の開催や、指導にあたることも行うが、最も異なるのは演奏者の気持ちによって、聴く人の心の有り方を変化させる一種の「術」に似た技を使うことである。

例えば、ジャララン！と複数の絃を鳴らして衝撃波を発生させたり、防壁を作る等、非現実的かつファンタスティックな要素盛りだくさんの箏技(ことわざ)を繰り出すことができる。

実用性の有無は如何せん、ごく普通の箏奏者を目指していた私が四年前、とある出来事が発端で、こてぃすと修行を始めたのだった。

当時の私は「こてぃすとは一生をかける価値がある！」と豪語する程その力を駆使していたが、年を経るにつれ次第に付け狙う敵の数も減り、結婚した今では皆無に等しくなった。

悪が蔓延る時代は終わったのだ。だからもう、こてぃすとを継続する必要もなく、お稽古に通い、年に数回ある演奏会に向けて練習に励むという至ってシンプルなお箏ライフを楽しんでいた。

しかし、社中の演奏会は多くても年に二回しか行われないため、練習もたるみがちになった。

三日以上は開けずに練習は行っていたが、三十分も弾けばすぐに飽きてしまう。

学生の頃のあの情熱は何処へ？という状態に近かった。

尻に火が付かないと本気で取り組まないわけではない。ただ、自分はこれでいいのか？もっと為すべきことがあるのではないかとも思うのだが、日常の雑事に追われて、その疑問も埋もれ、記憶も薄れ、ときたま思い出したとしても、同じように自問自答の繰り返しで結局結論に至らぬまま今日を迎える。

自分にできることなんて限られている――けれども、その限られていることを果たして自分は実行

できているのだろうか。

月曜日の仕事帰り。マンションの前に辿り着き共用玄関のポストを開けた。

ぱっと見たところ、通販カタログやダイレクトメールが五通ほど入っていた。郵便物をまとめて取り出し、そのままエレベーターへと向かう。

現在の住まいは鉄筋コンクリート造三階建ての最上階東側角部屋である。日中箏を気兼ねなく弾くにはうってつけの物件で夫も快諾してくれたのだった。

部屋に着くと玄関の扉を開けて電気をつけた。靴を脱いでそのままダイニングへと入る。郵便物は無造作に中央の黒いテーブルに置いた。その中に白い洋封筒が混ざっているのが目に付いた。

宛先は書かれていない。よくある不特定多数への案内だろうかと思いつつ、裏を確かめてみても何も記載されていなかった。封筒の中心がわずかに膨らんでおり、触るとゴツゴツした硬い感触がした。

無料サンプルかなと予想しながら、とりあえず中身を取り出した。出てきたのは白い便箋一枚と、薄桃色の小さな石が一つ。便箋の内容は達筆でこう書かれていた。

「龍月（りゅうげつ）へ　誕生日おめでとう。少し早いけどお祝いを贈ります。必ず願いを叶えます。　あなたの大切な人より」

（何じゃこりゃ…）

読み終えると謎の悪寒が背筋を走った。

今週日曜日が私の誕生日であるのは間違いない。しかし手紙の内容が私宛ではないことと、差出人が不明であることに並々ならぬ不審感が募った。それと同時に、ほんの数行の文章で私の頭の中に鮮明な記憶が蘇った。

龍月は私の中に存在するもう一つの魂である。この世界は私達人間が暮らす地上界の他に、天界と魔界の二つの世界とも繋がっている。

天界には「統べる神」という神様を中心に、各分野の神様が存在し、彼らに仕える「使い」と呼ばれる者がいる。天界の者達は神様の意向を人間に伝える役割と同時に、人間を正しい方向へ導く活動を行っている。

反対に魔界は、魔王を中心とした「フレリ」という管理組織が統制しており、彼らは人間の負の感情につけ入り悪の道へ誘おうとしている。

龍月は、天界の神様の使いの父と、魔界のフレリの母の間の子として生を受けた。

天界や魔界では異種同士が結び付くというのは非常に稀らしく、快く受け入れられる環境ではなかった。まして彼女の母はフレリのトップである「ハナ」という責任ある立場だったため、いざこざを避けるために止むを得ず、娘の魂を地上界へ送ることになった。

そして、たまたま私の母のお腹に宿り今に至る。

という衝撃的な事実を知らされたのは四年前。なんと、龍月の父が地上界へやって来て全てのいきさつを話してくれたのだった。半信半疑ながらも、次々起こる奇怪現象に私は真実を認めざるを得なかった。

こてぃすと修行のきっかけは、龍月の父違いの兄である龍星（りゅうせい）の襲撃だった。

地上でも幸せに暮らせるようにという絶対的な祈り込められた龍月の魂と共に在った私は、当時傷心の日々を送っていた。唯一拠り所としていた箏も、長年付き合った人との別れにより、悲しみの感情と音色が共鳴し合った結果、魔界では騒音被害が広がる事態にまで発展してまった。

それを聞きつけた龍星が、数年前から病に伏せっている母はこの箏の音色のせいだと言いがかりをつけ私を消そうとしたため、対抗すべく身に着けた技だった。

危機に瀕したものの、彼の母が誤解であることを説得しに現れてくれたおかげで事件は一件落着した。

その後は龍月の父と母には会っていない。彼女の存在を知っているのは家族くらいだと思うので、手紙を書くのも彼らしか思い当たらない。

けれども、それならば「あなたの大切な人」というのが矛盾している。

家族なら父とか母とか名前をそのまま記せばいいもものを、分かる者にだけは分かる特別感でも出したいのか、もったいぶった感じにむず痒さを覚えた。周りの目を憚ってわざと記した可能性も考えられるが、昨年、一昨年も、こんな手紙をよこしたことなど一度もなかった。

（今年に限ってなんで？もしかして、生誕三十周年祝いとか……？）

そう、私は一つ歳を重ねると三十歳。

嬉しいような悲しいような複雑な心境だ。二十歳になる時も、十代ともおさらばかと欝になりかけていたのにもうあれから十年、今度はより一層年齢の話題に敏感になるとともに、溜息をつく回数も格段に増えていた。

それはさておき、手紙の最後の「願いを叶えます」という一文。龍月の願いとは一体何なのだろう？

というか、私の中にいるのにどのように彼女と接触したのかが最大の謎である。

更に、お祝いにしては淡白な文章——と考えれば考えるほど深まる謎に戸惑った。

しかし実際に龍月の父から手紙をもらったことはないので、天界では当たり前のことなのかもしれないと気に留めないことにしておいた。

（あ、追伸あった）

「この石は魂を繋いでくれます」

同封されていた薄桃色の石のことだろう。直径三センチ程のつるつるに磨かれたそれは、土産店や雑貨屋で売られているお手頃価格のパワーストーンのような目立った特徴もない石だった。

（彼は何か知らんやろか……）

「ワラビ！」

私はリビングに隣接する和室に向かって小さめに叫んだ。

が、しんと静まり返ったままで特に変わりはなかった。

（シカトか！ええわ！）

「ゼンマイ」

再び同じ方向に呼びかけた。

「ふぬぬーん！」

鼻にかかったような鳴き声でやって来たのは精霊のゼンマイだった。

ゼンマイは私の箏の精霊である。体長約二十五センチ。ネズミとキツネザルを足して二で割ったような動物だ。小柄体型なのに目だけがモモンガのように異常にくりっとしているため少々不気味で、「可愛い」よりも不細工可愛い「ぶさカワ」という方が合っている。

精霊は箏だけでなく全ての物に存在すると言われている。但し、人前に姿を現わすことは滅多になく、現れたとしても必ずしも見えるとは限らないらしい。私は運良く目にすることが出来た。

ちなみに、現在使用中の箏は使用歴約三年目の準新品である。

以前は親戚の叔母さんに譲り受けた箏で練習していた。それにも「ワラビ」という人語を解し話せる精霊がいるのだが、非常に気難しい性格のため、先程のように呼びかけても一回で来ることはほぼなかった。それに比べてゼンマイは素直で好奇心旺盛な性格で親しみやすかった。

短い脚でトタタタ——と素早くテーブルに登るゼンマイ。

「これ何かわかる？」

「ふぬ～？」

ゼンマイは頭を横に傾けた。

どうやら彼にも何かよく分からないらしい。分かったところで説明されてもワラビに通訳してもらわないと詳細は通じない。

ゼンマイは一生懸命、身振り手振りで伝えようとしてくれるが、正確に捉えるのは難しかった。

数年後には、ワラビと同様に話せるようになることを願ってやまないこの頃である。

ゼンマイに「ありがとう」と伝えると、彼は一鳴きして和室に戻って行った。

とりあえず、御守り類は肌身離さず身に着けている方が良いだろうと思い、かといって財布に入れるとでこぼこして邪魔なので、ベッドボードにでも飾ろうと寝室に赴いた。

寝室の中央にあるダブルベッドの宮棚には、手乗りサイズのカピバラ、犬、ウサギのぬいぐるみがきちんと一列に並んでいる。私は三体の中央にちょこんと石を置いた。

（仁達（にんたつ）気付くかな……）

夫の仁達は医療従事者として日々多忙を極めている。

交代制勤務のため出勤時間は毎日バラバラである。午後以降の勤務の日は、早朝から昼食と夕食の弁当作りで時間に追われる代わりに夜はゆっくりと過ごせた。

夕方から勤務の場合、帰宅は夜中十二時を過ぎるので私はいつも先に寝ている。

彼は小腹をすかせて帰ってくるので、あんパンや餅系和菓子等をポンとテーブルに置いておけば勝手に平らげてくれている。今日は、昨日買っておいた「つぶあん団子三本入り」である。

私は手紙と石については後回しにし、夕飯の準備を始めた。

といっても献立は、ご飯、弁当のおかずの残り、納豆に卵、冷凍食品のかぼちゃコロッケ、インスタント減塩味噌汁と五分もあれば完成してしまう。一人の時は独身時代に戻った食生活にガラリと変わる。食べてくれる人がいるからこそ料理も作り甲斐があるというもので、こんな時ぐらいしか思い切り手を抜けなかった。

私は十五分で夕食を食べ終えると、洗い物を済ませてから箏の練習タイムに入った。

現在練習中の曲は、日本を代表する音楽家、球白（たましろ）キチオ秘曲の『背ワタ』という箏独奏曲である。

調理中のエビの背腸取りの葛藤を中心に描かれた曲で、楽譜に記載されている解説によると、苦心しながら大量のエビの背腸取りを終えた後、窓の外から空を見上げると満天の星空が輝いていた。

変わらぬ夜空なのに、いつもに増して心に染みる情景だった――というエビの背腸取りと星空という飛躍しすぎた組み合わせが一貫性に欠けていそうに見えて、箏の技巧が散りばめられた名曲といわれている。

私が弾くと約七分かかる。箏の曲の長さはまちまちで、短い曲は三分以内で終わるのもあれば、三十分近くかかる長い曲もある。それを考えると背ワタは聴き手にも程よい長さの曲といえた。

練習期間約五カ月、暗譜もほぼ完璧に出来、再来月の発表会に向けて仕上げ段階に入っているところだった。

練習部屋となっている五畳半の和室には箏が二面置いてある。

一面は箏を習い始めた頃に親戚の叔母さんから譲り受けて使用していたもので、現在は予備用として黒いケースに入れ部屋の隅に寝かせてある。もう一面は結婚前に貯金して購入した箏だ。

結婚資金にまわすか悩んだが、自分の箏なら練習ももっと捗るはずだと思い奮発してしまった。

そのおかげか、外泊時を除き、疲労困憊で弾ける体力すら残っていない日以外はほぼ毎日練習に取り組むようになった。

すると先生や他の生徒の間では、特に練習熱心な人だと思われるようになってしまったらしい。

けれども、楽器は本来飾るためではなく弾かれるために存在するのだから、それが自分で買った箏なら尚更愛着心が沸き、その箏の魅力を最大限に引きした演奏をしたいと誰しもが願うのではないか。

と思うのは、箏を弾くことが日課の一部になってしまった影響にちがいないと、好きな物にはのめり込みやすい性格なのだとつくづく感じていた。

私は箏の前に立つと、梔子(くちなし)色の油単(ゆたん)即ちカバーをぺらんと捲った。

毎日練習することが前提なので、基本は箏を立奏台に乗せっぱなしだった。

立奏台とは、椅子に座って弾く際に箏を乗せる台のことである。正座をして演奏する座奏は足が痺れやすいため、練習時もお稽古時も通常は立奏で行っている。

楽譜や演奏小物が入ったカラーボックスからチューナーと爪箱を取り出した私は、丸いクッション座面の折りたたみ椅子に座った。

弾く前には調絃を取り直す必要がある。基音よりも低いあるいは高ければ、箏柱(ことじ)という絃一本一本にかかっている駒のような物を動かして高さを調節する。箏柱から弾く側までの絃の長さが長いと低い音、反対に短いと高い音が出る。

調絃を取り終えると、いよいよ練習開始。だいたいはじめは一曲通して弾き、苦手な部分を後から集中的に練習するスタイルだった。

（気が乗らんなあ…）

弾いていても今日はいつものように感情移入が上手できなかった。

雑念が混ざると大抵集中力が途切れ、普段落とさないような部分でもうっかりミスをしてしまうことがあるのだ。

今は心の中で例の手紙と石のことが気になってもやもやしていた。

（明日も弾くし、今日は軽めにしとこう）
　私はだらだら続けるよりも早く切り上げる方が良いと判断し、もう一度さらっと流して練習を終えた。

　何十回に一度あるかないか、珍しくここは夢の中だと認識できるくらいに頭が冴えていた。
　私はどこかの部屋の中にいるようだった。気の滅入るようなニオイがする。例えるなら、押入れに仕舞いっぱなしのじめっとした布団の臭いに近かった。
　部屋には壁付きの明かりが二つ。薄暗くてはっきりとは判らないが、物書き机と椅子が一つずつ、天井まで届く高さの本棚が壁に三台、どれもアンティーク調で統一されて、シックな雰囲気を醸し出していた。中でも特に目を引いたのは重厚な作りの本棚で、分厚い本が全段にぎっしり詰まっていた。
　よく目を凝らしてみれば、本棚の前に誰かが椅子に腰をかけているではないか。一歩進むと相手はくるりとこちらに振り向いた。
　切れ長の深碧の瞳に思わず息を飲んだ。歳は二十三、四くらいだろうか。艶やかな黒髪は肩を過ぎるくらいの長さで、ふんわりとした前髪は眉下できっちり切り揃えられていた。
　初対面の相手なのに会ったことがあるような懐かしい面影があった。
　彼女は手にしていた本をパタンと閉じると、徐に立ち上がり私の方へ近寄ってきた。
　明かりに照らし出され全体像が映った。
　膝が隠れる丈の濃赤チェックのスカートを履き、レース刺繍が施された黒の七分丈ニットの上には金色に縁どられた薄手のストールを羽織っていた。袖口から見える白い手首は恐ろしい程透き通っていて、その眩さに地上界の住人ではない確信を得た。
「龍月……？」
　自然と口を突いて出た時には、彼女は微笑を浮かべていた。
「うん。あなたは琴音だね」
　龍月は静かな声で答えた。
「はじめまして……っていうのもおかしいんか。会えるなんて思ってもなかった」
　私と歳は変わらないはずなのにずいぶん若い容姿だった。
　人間と使いでは歳を取る早さも違うのか。以前彼女の父に会った時も、外見は三十歳前後と若かった。もし二人が一緒に歩いている所を他人に見かけられたら、親子ではなく、兄妹あるいは恋人同士と判断するのが自然だろう。
　龍月は初対面にしては落ち着き払っていた。
「ずっとここにいたんだけどね。普通では別々の魂が会うなんてこと不可能だから」
「あの石のせいかな」
　ボソリと呟くと龍月は首を傾げた。
「今日、ポストに龍月宛の手紙が入ってて」
「誰から？」
「書いてなかった。手紙の内容は『誕生日おめでとう、お祝いを贈ります』って。あと、小さい石が

入ってた」
　すると彼女は目を見開いた。
「それはムオウ石！？」
「薄いピンク色のつるつるした石やったけど」
「夢逢石（むおうせき）っていうの。わたしのような浮遊する魂と交流できる石だよ」
　彼女はやや困惑している様子だった。
「これ、お父さんからもらったものじゃないの？」
「違う、これはあの人が…」
「あの人？って、ちょっと、大丈夫！？」
　龍月は突然頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。
　顔色が真っ青だった。私は彼女の傍に寄り肩に触れた。
「ぴゅう…」
「え？」
「日向（ぴゅう）。使いの一人でわたしの婚約者」
　彼女はそのままの姿勢で私の目を見つめた。
「婚約者？でも、さっきずっとここにいたって」
「ただの部屋のように見えるけれど、実際は天界と魔界を行き来できる道に繋がっているの」
　すっと部屋の隅の開き戸を指さした。扉の隙間から僅かに光が漏れていた。
「天界と魔界の間ってことか。うちのイメージでは眠ってるんかと思ってた。昔聞いた話では、体になる前の魂ってことやったから」
「この空間だから実体化されているだけで、本来は形はない。あなたが過ごしている世界もわたしには正確には見えないし聞こえない。ただ、嬉しいとか悲しいとかの感情の波は感じ取ることができるよ」
　自分に非はないものの、彼女の話を聞いて居た堪れなくなってきた。
　それを見抜いたのか彼女はふわっと優しく笑んだ。
「あなたが悪く思う必要はないよ。こういう静かな環境の方がわたしには合ってる」
「でも、お父さんやお母さんに会いたいと思うやろう？」
「う～ん……」
　彼女は眉を寄せた。
「会いたいけど、もういいかなって気もする。この生活に慣れてしまってるから。わたしを大切に思ってくれてるのはわかってるし、そんな状態で会ったら恥ずかしいというか、照れくさいなあ。面と向かったら何も言葉が出てこないと思う」
「そっか……」
「それに、衝動に駆られて一発殴ってしまうかもしれない」
　大人しそうな顔をして過激なことを言う彼女に度肝を抜かれそうになった。
　きっと愛情表現の裏返しだろうと真に受けないことにした。

「そういえば、日向って使いの人とは長い付き合いなん？」
「十年前だったか、星空……ここの外にいた時たまたま知り合ったの。なんでも魔界に用事があったとかで」
「天界から魔界へはフツーに行けたんやっけ」
　私は薄れゆく記憶を手繰り寄せようとした。
　世間の動向にも疎い人間なのに、天界や魔界が混ざると更にややこしくなって、それぞれの世界の秩序を理解しようとするものなら、一度見学ツアーにでも連れて行ってもらわないと半分も理解できなさそうである。
「天界から魔界へは行き来できるけど、そのルートは神様の許可がないと通れないらしい。日向は神様からの命令で来たって言ってた。詳しいことは教えてくれなかったけど、まあそこまで問い詰める必要もないかなと思って」
「はあ……」
　それでよく婚約まで出来たものだと、私の呆れ顔を見越してか彼女は言葉をつけ足した。
「あ、でも、人柄は良いよ。はじめは疑ってたけど、一緒に過ごすうちに優しい人だなあって。波長も合う感じだし。わたしの生まれのことも特に気にしてなかったみたいだから」
「ふうむ」
　結婚前だというのに淡泊な印象も受けたが、十年も交際していれば淡い恋心なんてなくなってしまうのかもしれなかった。
「結婚までに十年か。使いの人達ってわりと悠長なんやな」
「ううん」
　彼女は首を横に振った。
「付き合って一年過ぎたくらいだったかな、十年後に迎えに行くよって言われたんだ」
「何？その十年後って。結婚準備期間にしては長すぎるやん」
　結婚前に一軒家を建てておきました！というパターンにしても十年は長すぎるだろう。
　その前に天界では居を構える慣習があるかどうかは不明だが。
「結婚するからといって必ず一緒に暮らす決まりはないみたい。だから、このままでも良いとは言ってみたんだよ。わたしにはもともと体がないから。そしたら、日向が神様に頼んで何とか器になるものを用意できるように考えるって。そのための十年だったらしい」
「へえ～よかったやん。これでのびのび暮らせるやん」
「いや、それはダメなんだよ」
「ダメ？」
「そうしたら消えてしまう」
「消える？誰が？」
「それは……」
　彼女は目を伏せ、ゆっくり瞼を開けると
「おまえだ……！」

カッと目を見開き、口を大きく開けた。
鋭利な歯がきらりと光った瞬間私は目を瞑った。
「うわあぁぁぁぁ〜っ！」
「琴音ちゃん！大丈夫！？って、うわあっ！おばけ！」
「へっ？」
視界を遮っているのは紛れもなく自分の髪の毛だということに気付いたのは三秒後。
一体どういうふうにどれだけ寝返りを打ったらこうなるのか、後ろの髪が前にだらんと下がり、「うらめしや」とでも脅かせば、本物の幽霊として通じそうなくらい恐ろしい姿に変貌を遂げているに違いなかった。
私の叫び声と、薄暗闇にぼうっと浮かび上がる異様な光景に仰天した夫の仁達は、上半身を起こしたまましばらく固まっていた。
私は髪の毛を両手でかきあげた。
「怖い夢見てて」
彼は我に返ると背中をさすってくれた。
「大丈夫大丈夫。ぼくが傍にいるから安心して寝や」
「うん、ありがと」
私は再び布団に入ると、仰向けのまま視線だけ宮棚にやった。
石には特に変化はなかった。

翌日、仁達は夕方からの出勤のため、朝食後に昨晩の夢の内容を事細かく話した。
仁達には付き合い当初から、こてぃすとのこと、天界や魔界関連の事件は全て報告済みだった。当初はぶったまげていたが、嘘と疑わず寛容な態度ですんなり受け入れてくれた。
けれども、さすがに夢の中で龍月に出くわしたことに対しては「マジで？」と言いたげな訝しそうな目つきになった。
彼はテーブルの上に置いた石を指さした。
「この石絶対怪しいよ。っていうか危ないよ。捨てたほうがいいんちゃう？」
「御守りみたいやし、ごみ箱にポイはアカンやろ。祟りがあるかもしれやんもん」
「そうかなあ〜夢に出てきたのって本当に龍月本人やった？」
「偽物じゃないやろう。文学少女って感じの可愛くて純粋そうな子やったなあ。見た目もうちより五、六歳若かったし」
「琴音ちゃんもそう変わらんやん」
「二十代の一歳の差は大きいもんやで。お肌の調子なんか特に。目元口元のカサつきがひどくなる一方……年々潤いがなくなってくわ」
「え〜？まだまだピチピチやよ」
「仁達のがピチピチしてるよ。うりゃっ」
私は仁達のほっぺたを摘んで縦横にぐにぐに回した。

彼は嫌がって私の手を取った。
「こらっ」
「ふふふふ…」
本気では怒らないことを知っている私は、摘むのをやめると次は手の平で頬をぺたぺた触った。
「いつでも笑顔を絶やさない」をモットーに掲げているためか、仁達は温和で何事にも真面目な性格である。
見た目に関しては、超絶イケメンではないが、面長顔にくっきりした二重、長い睫毛、ぷっくり涙袋、更につるすべ美肌と、パーツは美男子並みに揃っている。
特別なお手入れをしているわけでもないのに、ニキビや吹き出物等余計なものが一切ないつややかでしっとりとした肌。年齢肌に悩み始めた私にとっては羨ましすぎた。
タンブラーに入ったミネラルウォーターをぐっと飲み干した仁達に私は言った。
「まあ、でも、怪しいのは龍月より、日向っていう人の方な気がする。十年後に迎えに行くって言われても待てやんやろ普通。二十歳なら三十歳になるで。うちなら別れてるわ。せめて五年かなあ……」
「きっと向こうの人とは感覚が違うんやって」
仁達はすくっと立ち上がりキッチンにコップを置きに行った。
「向こうの人」というのは、天界や魔界に住まう者を彼はまとめてこう呼ぶことにしているらしい。
「結婚の約束もやけど、その男がどうして家の住所知ってるかが気になるんやけど」
「それは天界口コミとか勘とか、その人の住まいのポストに投函される自動システムがあるからとかちゃう？」
意表を突く疑問に私は適当に回答した。
わりと細かいことを気にする質である。
「この御時世、個人情報はどこからでも漏れやすいもんなあ」
仁達は私の予想には触れず一人納得していた。
「それにしても十年がかりのサプライズなんて、なかなか約束できやんよな。あー考えてもわからん！」
くーっと伸びをした私。パキパキパキとどこかの関節が鳴った。
（ワラビは何か知らんかな…）
私は「ゼンマイ～！」と和室のゼンマイを呼び寄せた。
「ワラビ呼んできてくれへん？」
耳元で囁くと、ゼンマイは「ふぬ」と短い返事し、タタタと和室へ走って行った。
私の直接呼出しは無視率八割だが、ゼンマイにお願いしてもらうと何故か出現率八割に上がるのだ。
五分後、ダイニングに姿を現したのは斑模様の一匹の小さな虎だった。
円な瞳と丸い耳。長くてふさふさの尻尾が特徴のネコに似た生き物である。彼は気だるそうに目を細めていた。
「ごめんごめん。この石置いてたら夢に龍月が出てきてさ。何か知らんかなと思って」
「知らない」
「はやっ！って、ちょい待ち！」

　他人との交流を避けるワラビの体を私は両手で掴んで引き留めた。
　振り向いた彼は至極不機嫌そうに私を睨んでいた。
「そんな怖い顔しなさんな。他に頼る術がなくて困ってまして」
　私が下手に出るとワラビは、
「もうすぐ現れるのではないか」
　と他所に視線を向けた。
「現れる？」
「手紙を書いた主だ。そいつに聞けばいいだろう」
「そうやけど……え、もしかしてもう来てる！？」
　私は勢いよく立ち上がった。
　その反動で椅子がガタン！と仰向けに倒れた。足を進めた私が戻りかけると仁達がそっと戻してくれた。
「あ、ごめん」
　仁達は気にしないでと言うように自然に笑った。
　寝室の窓を開けベランダに出てあたりを見回したが特に人の気配はない。
「どうしたん、急に？」
　後から追って来た仁達もベランダに出た。
「ワラビが、手紙の主が来るとか言うからてっきり……」
「玄関から入ってくるもんじゃないの？」
「あ、そうか」
　私はすぐさま室内へ戻った。龍月の父が飛んでいたので、天界の人達は皆飛べるという先入観で、心ともなくベランダに赴いてしまった。
「手紙内容は怖いけど、実際に会ったら説明はしてもらえるんじゃないの？天界には悪い人はいないんやろう。『人を正しく導くため』のことをしてるなら危害を加えることなんてしないんじゃないのかな」
「そうやといいんやけど…」
　これまでの経験上、穏便に解決できた試しがないので、今回の件も不安が押し寄せつつあった。
　わからないもの同士でいくら考えても進展がないので、私は今やるべきことをすることにした。
　洗濯や掃除などの家事を済ませ、五分で化粧、二分で絡まった髪の毛を整え、右肩サイドで一つ括りにし、ビーズのついたヘアクリップでまとめた。
　買い出し準備万端！と洗面所から出てきた時「ピンポーンピンポーン」とインターホンが二回鳴った。私は小走りでリビングまで行き、インターホンの受話器を取った。
「はい」
「凛堂（りんどう）さんのお宅でしょうか？」
「はい、そうですが」
「私（わたくし）、昨日手紙を送らせていただいたぴゅうもっそと申します」

「はい。ぴゅう？……日向さん？」
　ひっくり返った私の声に、ダイニングテーブルでスマホをいじっていた仁達が注目した。
「お話したいことがあるのですが、お邪魔してもよろしいでしょうか？」
「ええと……ちょっと待ってください」
　私は受話器を放し仁達に尋ねた。
「例の日向さんが話したいことあるから来てもいいですか？て」
「別にいいけど……」
　仁達に許可を得ると再び受話器を取った。
「あの、では開けます」
「ありがとうございます」
　共用玄関のロック解除ボタンを押した。
　そして私は高速で周囲に散乱していたティッシュボックス、チラシ、腹巻、レッグウォーマー等放置させて見苦しい物を、取っ手付きの四角い布張りボックスの中に力任せに押し込みフタを閉めた。
　しばらくして家の玄関のインターホンが鳴った。
「は〜い」
　そっと扉を開けるとそこには二人立っていた。
　一人は黒のスーツに薄紫のストライプ柄のネクタイを締めた社会人三年目くらいの優等生的なイメージの男性、もう一人は彼と同い年くらいの女性だった。
　首元には金糸雀色のおしゃれなスカーフを巻き、濃赤色の薄手ダッフルコートに琥珀色のショートパンツ、赤いハイヒールパンプスというカジュアルスタイルできまっているのに、髪型はピンクがかった茶髪に先端をくるんと巻いたツインテールというちぐはぐなコーディネートだった。
「はじめまして。お忙しいところ急にすみません」
　男性はにこやかに挨拶をした。程よく垢抜けた好青年という印象を受けた。
「いえいえ……」
「私は長寿の神、千富玲様の使いの一人、日向物素と申します。こちらは双子の姉の芽乃物素です」
「どうも、芽乃です」
　芽乃と呼ばれた女性がペコリと頭を下げた。
「手紙は読んでいただけましたでしょうか？」
　日向が丁寧な口調で私に尋ねた。
「はい……石、夢逢石っていうのが入ってましたけど」
「よくご存知で」
「龍月に教えてもらいました」
「もう会われたんですね。では話が早く済みそうです」
　彼はパアッと笑顔になった。
「結婚のことですよね？」
　私の胡散らしい視線にも彼は表情一つ変えなかった。

「はい。詳しいお話をと……」
「立ち話もなんですので中へどうぞ」
「ありがとうございます、では失礼します」
　私は玄関扉を大きく開いて彼らを家の中に招き入れた。
　リビングにつながる扉を開けると、寛いでいた仁達が来客に気づいて立ち上がった。
「あ、どうも……」
　戸惑う仁達に日向はスマイル百パーセントで、
「こんにちは。私は日向物素と申しまして、長寿の神、千冨玲様の使いの一人です。急にお邪魔してしまいすみません」
　と自己紹介するものだから質問や文句すら言えず、仁達も、
「夫の凛堂仁達です」
　と名乗るほかなかった。
「隣にいるのは私の姉の芽乃です。私だけでは説明不足もあるかもしれないので同行させていただきました」
「よろしくお願いします」
　挨拶をした芽乃は仁達と目を合わせると、はっと何か衝撃を受けたらしい。
「ちょ、つる肌…」
　と口に手を当てた。
「え？？」
「いや、何でもないです」
　彼女は手を左右に振って淑やかに笑った。
　一通り挨拶をした後、私たちはダイニングで話し合うことになった。
　話を切り出したのは日向だった。
「既にご存知とは思いますが､私はあなたの中にいらっしゃる龍月さんと結婚することになりまして、今後の手続きなどについてこれからお話したいと思います」
「手続きって、そもそも龍月は魂だけの存在ですよね？それをどうやって実体化させるんですか？」
　私は初っ端から核心を問うた。
　ただでさえ未知の世界の問題なのに、上手く言いくるめられてはたまったもんではない。
「それが一番重要なことでしたね」
　日向は動じることもなく話し始めた。
「天界のある場所には、魔界へとつながる道があります。その道のまわりには無数の魂が彷徨っています。この空間を私達は『星空』と呼んでいます。私達には星空の魂はぼんやりとした光にしか見えません。けれども、夢逢石を使えば魂の姿を捉えることができる上に会話も可能になるのです。
十一年ほど前、神の命令で夢逢石を持って魔界へ向かう用事がありました。夢逢石は魂の管理をされている千冨玲様がお作りになったものです。私が道を通っていると偶然、星空にいた人物に目が留まりました。それが龍月さんです。星空を眺める彼女の凛とした表情に惹かれた私は思わず声をかけた

のです。彼女は初めのうちは警戒していましたが、何度か通う度打ち解けていき、いつしか深く愛するまでになっていました」
　日向は恋愛物語を朗読するが如く穏やかな声だった。
　龍月も似たようなことを話していたので、出会いのきっかけは信じてもいいだろう。
「そして一年が経ち、そろそろ結婚を考えてもいいかと思ったのですが……」
「魂だけの存在である彼女をどうやって天界へ連れ出すか悩んだ」
　突然俯く日向に芽乃が言葉を続けた。
　彼はうら悲しそうに彼女を見やった。
「琴音さんと龍月さんの魂を切り離すことは理論上は可能です。が、分離した後、龍月さんの魂に合う体と琴音さんの魂に合う型の魂を見つけるのがとても難しいのです」
「龍月の体だけじゃなくて、うちにもくっつける魂が要るんですか？」
「はい。殆どの人間は一つの魂ですが、人間と使い、あるいは人間と魔の者など稀に複数の魂を持つ人が存在します。このような人達は二つの魂で体と心の均衡が保てると言われています。ですので分離した際、琴音さんにも別の魂と結合させる必要があるのです。ただ、全ての魂には型があり、類似した魂でないと上手く結合できません」
「全然自覚なかったや」
「主体である人には、もう一つ魂が存在するという実感がないのでわかりづらいかもしれません。でも、過去に無理にかけ離れた魂と結合した結果、精神を患ったり、体に不調が表れたり、中には亡くなった方もいたのです」
　魂選びは慎重に――自分で選べるようなものではないのに脳裏にこんな標語が思い浮かんだ。
「ご安心ください。あなたに合う魂もすでに見つけてあります」
　日向は私を元気づけるように微笑んだ。
「うちのほうはわかりましたが、龍月の体はどうやって？」
「浮遊魂を身体に入れる方法は二つあって、あらゆる物、たとえば、人間に作り出されたものに入れる方法と、瀕死状態の動物または人間の魂と入れ替わりになる方法があります。前者の場合は容易ですが生活上現実的ではないので必然的に後者の方法となります。けれども、今の魂の姿形で入れ替わることはできません。元の体の主と容姿が酷似していたり、本人が気に留めなければ問題はないのですが……」
「じゃあ、龍月の場合はどうなるんでしょう？」
「可変物体を使うんです」
「可変物体？」
「はい。生き物でも物でもない、魂専用の器が天界には存在します。そこへ彼女の魂を取り込み、魂の記憶によって後から体を形成します」
　思いもよらぬハイテクノロジーに、私は話の流れについていけずポカンとするしかなかった。
「天界では日々魂の研究もなされているんですよ。まずはあなたと龍月さんをつなぐコードを切り離せさえすれば、後は今お話しした通りです」

「そのコードというのは？」
「すみません、説明不足でしたね。通常、魂からはコードのようなものが少し出ていて、類似した二つの魂が接近すると、引かれ合って一つの魂を形成すると言われています。あなたと龍月さんのコードも魂の型が近いので結合されています。結合といっても、わずかな隙間があるのでお互いに干渉できません。しかし、夢逢石を使うことでもう一つの魂とぴったりとくっつき交流ができるようになっているのです。夢逢石はいわば強力な磁石のような物です。」
　魂管理の神様に使えているだけあって日向は流暢に語った。
　何となく気配は感じるけれど、正確には何が起きているかは把握できない。龍月の話していた通りだ。この十年の間に私の知らない所で見えない変化が起きていたらしい。
　話の要点はおおよそ理解できた。しかし、ここで一つの疑問が沸いた。そんなことが出来たなら生まれた時からそうしろよというものである。
　天界で育てられなかったから彼女の魂を地上へ送り、人間つまり私と体を共有させたと聞いていたが、可変物体に入れて地上へ送れば龍月個人として生きられたのではないか。私は口を開こうとしてはたとやめた。そうできなかったのは何か特別な事情があったのかもしれない。
　今こうやって普通に会話しているけれども、今日初めて会ったばかりの人達、安易に信用してもよいのだろうか。とだんだん疑わしく思えてきたのだ。
「赤の他人が何故こんなこと知っているのかと疑わしいところですよね」
　日向は謝るような素振りだった。
「そういうわけじゃ……」
　私は心を読まれたのかと一瞬焦った。
「疑われても当然です。今日初めて話したことですし。でも、夢逢石で龍月さんと会えたことからその力は偽物ではないということはわかっていただけたかと」
「それは、まあ、はい。ただ、スケールが大きすぎてついていけへんというか……」
「戸惑うのも無理ないですね。今すぐに決断をとは言いませんが、彼女の気持ちも汲み取ってもらえるとありがたいなあと」
　彼女の気持ち――寂しくはないと言っていたが、好きな人と一緒になりたい思いはあるだろう。と夢の内容を振り返りあることを思い出した。
「そういえば……」
「なんでしょう？」
「昨日龍月に会った時、体を入手できたらうちが『消えてしまう』って言うてたんですけど」
「それは彼女の勘違いです」
　日向は断言した。隣にいた芽乃も大きく縦に頷いた。
「いや、でも、シャ～ッ！って鬼みたいにかなり狂暴になってましたけど、あれは……」
「私がうまく説明できていなかったからかもしれません。それと、長い間あんな狭い所で暮らしているからでしょう。早く解放してあげたいものです」
　彼は残念そうに目を伏せた。所々棘を含んでいるような話し方だった。

「そうやったんですね。あと、親に挨拶はしないんでしょうか？結婚を決めた時はそれぞれの親の家へ行ってっていう……それって人間だけですかね」
「特にそういったことはしないですね。いずれ機会があればするつもりではいます。大事なことですから」
　ここまで緻密に練った計画に対して分離作戦を断れば、彼のこれまでの努力を無駄にしてしまうのではないかと思うと、自分にも龍月にもリスクがなければ進んで協力しようという考えも選択肢の候補に挙がった。
「お返事は日曜日にいただけたら幸いです。またお昼前十一時頃にお伺いします」
「誕生日の日ですね」
　私は冷蔵庫に貼ってあるカレンダーを見た。一応赤丸で印は付けてあった。
「お二人の記憶に残る一日にします」
　そのウエディングプランナーばりの営業文句は、三年前の結婚準備中の打ち合わせを思い出させた。
　龍月にとっては長い準備期間を終えてようやく結婚に至るわけなので、主体である私も祝福の気持ちでいっぱいになるはずなのに、どこかしら腑に落ちない感覚も否めなかった。
「話は逸れますが、琴音さんはお箏を習っていらっしゃるんですよね？」
「えっと……はい」
　突如箏の話題を振られドキリとした。
「龍月さんからうかがいました。四年前はこてぃすとでもご活躍されたとか」
「……そんな出来事もありましたね」
　箏を弾くことは知られても構わないのだが、世間一般、箏曲界においてすら、偏屈職人のような怪しいイメージを持たれかねないこてぃすとも兼ねていたことは、おおっぴらにしたくなかった。
　けれども、自ら公言しなくとも天界ネットワークで何れは広まってしまうのであれば隠す意味がなかった。
「実は私も天界でお箏を少々嗜んでおりまして。千冨玲様がお弾きになるんです」
「ほお！もう長いんですか？」
　私は思わず身を乗り出した。日向は気恥ずかしそうだった。
「まだ三年程度です。自分でも心地良い音色を奏でてみたいと思って」
「どんな曲を弾かれてるんですか？」
「そうですね……最近では山葵（わさび）トビ代の『蒲鉾帆立（かまぼこほたて）』とか」
「その曲弾いたことあります。山葵曲では控えめ系の曲ですけど、心休まる感じが好きなんです。もうそんな曲弾ける腕前なんですね」
『蒲鉾帆立』は講師資格試験の課題曲に選曲されるほど難易度の高い曲である。それを三年ちょっとで弾けるというのは、かなりの努力家あるいは才能の持ち主とみた。
「いえ、まだまだ未完成ですよ。また教えてください」
「いやいや！うちの弾き方は先生に注意されまくりなので全然良いお手本にならないですよ。十年も続けてるのに」

「人によって表現の仕方も異なりますから。演奏技術に関しては極められているとお見受けします」
「多少の進歩はしてますかね……」
　褒めちぎる彼に私はぎこちない笑みを浮かべた。
　思わぬ所で箏仲間が見つかったなあとほっこりしていると、
「あの、ちょっといいですか？」
　芽乃がぱっと立ち上がり、向かいの席に座っていた仁達の傍へ近寄った。
　つけ睫毛を付けているかのように長くカールした睫毛と、くっきり引かれたアイラインで盛られた瞳で彼を凝視した。
「な、何ですか？」
　仁達はたじろいだ。
「綺麗なお肌してますね。何か特別なお手入れを？」
「え、いいや。普通に化粧水と保湿液だけですけど……」
「シンプルなお手入れだけでそんな美肌が！すごい！びっくり！」
　芽乃は目をキラキラと輝かせてはしゃぎ始めた。
　その姿は女子学生のように生き生きとしていた。
「あたし、天界で美容スタイリストをしてて、たまに地上へ来ても勉強しているんです。こうして出会う人達のお肌を観察して、天界での美肌活動に役立ててます」
「向うの人達は元からキレイって聞きましたけど」
「え？あたし綺麗？やだもう！上手なんだから！お世辞でも嬉しい！」
　バシンと仁達の肩を叩いた。
　タメロで無意味に高いテンション。喋り方や見た目はイマドキの若い女子なのに、ところどころの仕草がおばちゃん化しており、私も仁達も呆気にとられていた。
「初対面で失礼だろう」
　日向が窘めると芽乃は、
「ごめん……」
　一瞬しょぼんとしたが、ぱあっと明るい顔で手を叩いた。
「今度よかったらお店に来てください！最新の美容機器とか試せますよ！『ィヤシマッセ』っていうお店で、場所はモソシ駅のすぐ傍のモソシ第二ビルの三階にあります。一階が『キュイモス』っていうカフェです」
「キュイモス」と耳にして、通勤時に毎回店の前を通っているのを思い起こした。世間は狭い。よく今まで目撃されなかったものだ。
　私はカフェを知っていることを敢えて口にせず、
「機会があれば」
　と社交辞令的な返答をした。
「火金はあたし出勤してるんで是非！」
　念を押す彼女に日向はやれやれといった風に首を振った。

「気になさらなくていいですよ」
「綺麗になりたいのは人間も使いも同じ！悩める人達に救いの手を差し伸べるのがあたしらの役目でしょう！」
　芽乃は熱く言い返した。
「無理強いはよくないと思うけどね」
　呆れる日向には目もくれず芽乃は得意気な笑顔だった。
「それではそろそろお暇しましょうか」
「そうね」
「どうもありがとうございました」
　日向と芽乃は深々と頭を下げてから席を立ち上がった。
「いえいえ、こちらこそ……」
　私と仁達もお辞儀をして玄関まで見送った。
　二人の後姿が見えなくなってから玄関扉を閉めた私はダイニングに戻った。
「どうやった？」
「使いって人間とは明らかに違う雰囲気みたいなんかなって思ってたけど、案外普通の人やったなあ」
「まあ、言われてみれば。でも、龍月のお父さんのように仮の姿やったら本来の姿とは全然違うわけやし」
「そんなに違うの？」
「全体的に色素が薄い人やったような。人間の姿でも神秘的なオーラ出てたなあ」
　人の印象を伝えるのは難しい。以前、絵を描いて説明しようとしたが、壊滅的な画力により正しく伝わらなかった。
「使いでも格の違いがあるのかな」
「そうやなあ。ところで分離の件はどう思う？」
　仁達はうーんと仰け反った後、
「よくわからん」
　と短く答えた。
「うちもや。ああ言われたら、そうなんか～ってしかならんし。龍月にとって良いことなら協力するけどさ」
「何か問題あるの？」
「お父さん、自分の娘が結婚すること知らんのに大丈夫かなと」
「向こうでは特に報告したりすることないって言ってたやん」
　仁達はあっさり言ってのけた。
「それならええんやけど。あの人もひゅっと気軽に下りて来られたら話できるのになあ～」
「ひゅって降りてこられんの？」
「ひゅっとくるかはわからんけど、昔えらいことしでかして、今は神様の許可がないと地上に下りて来られへんみたい。四年前は用があったから来てくれたけど今回はどうなんやろな」

「連絡も取れんの？」
「どやって取るん？」
「ケイタイ？」
「天界にあるかそんなもん。もしあったとしたらもう使ってるて」
「冗談や冗談」
「仁達はたまに素で言うことあるもん」
　私はチッと舌打ちした。
　深刻な状況なはずなのに緊迫感ほぼゼロの夫婦。
「とりあえず、今話聞けるのは龍月本人くらいやな。今晩また聞いてみる」
「大丈夫なん？また悪夢見るんじゃ……」
「じゃあ、寝る時ぎゅってくっついといてよ」
「うん、わかった！」
　仁達はすごく嬉しそうだった。
　密着したらからといって悪夢を見ないとは言い切れないが、安心感は得られる。
　私は彼を頼もしく思いながら今度こそ買い物に出かけることにした。
　午後三時過ぎ、仁達を見送ると箏の練習をすることにした。昨日サボった分、今日は真面目に取り組まねばと和室へ赴いた。
　お稽古曲である『背ワタ』を練習しないといけないのだが、二回流したら飽きてしまった。
　飽きる程弾き込んでいたわけでもない。ただ、今はエビと戯れたい気分ではなく、もっとのびやかな曲が弾きたかったのだ。
　私は一息ついて立ち上がると、部屋の窓際に設置している三段カラーボックスの最上段の楽譜入れから『蒲鉾帆立』の楽譜を引っ張り出してきた。
　この曲は私にとって思い出深い曲の一つだった。
　約四年前、まだ仁達と付き合い始めて間もない頃、河原の近くに住んでいた私は、彼のために「お花見コンサート」と題して満開の桜の下、五曲ほどのミニ演奏会を開いたことがある。
　そのうちの一曲が『蒲鉾帆立』だった。試験選択曲の一つなので弾きごたえがあり、海や波を連想させる幻想的な曲調でわりかし好きなのだが、『背ワタ』以上に哲学的で奇抜な描写に頭を悩ませた。
　解説によると、「この食べ物は帆立のように見えるが実は蒲鉾である――人の視覚はあやふやなもので、帆立と言われたらもうそうしか見えなくなってしまう。口に入れた時はじめて別の物と認識し、騙されたと憤慨する。しかし噛みしめる度に蒲鉾の帆立という、未だかつて味わったことのない新しい味覚の世界へ誘われ、晴れやかな気分へと一変する。そんな驚きと感動を表現した曲である」と記述されていた。
　お稽古期間中は特に、スーパーの練り物売り場で蒲鉾を見かける度、この曲が頭の中をぐるぐる駆け巡った。仁達には詳細な説明をしなかったので、『蒲鉾帆立』の演奏後も、他の曲と同様に感激していた。
　彼にとっては初めて見る楽器と初めて聴く音色に感激し、「これはもう、月一でコンサートして語り

伝えていかなくちゃいけないよ！」と大それたコメントをくれた。
　さすがに月一でコンサートは開催できなかったが、結婚後もこうして箏を練習できる環境にあることは彼の理解と協力のおかげでもあった。
　自主練習でごくたまに『背ワタ』に嫌気が差した時はこの曲を弾く。
　我武者羅にではなく、自然に思うままに音を奏でる。すると奇妙なことに、体がリラックスし、頭が切り替わり、また『背ワタ』を弾きたいと練習意欲が沸いてくるのだ。
　傍から聴くと子守唄のような静かな曲ではなく、クライマックスはじゃんじゃか絃を鳴らすのでうるさいくらいだ。習い始めた当初は難しく、楽譜を追うので精一杯だったが、私の弾きたいイメージに技術力が達したためだろうか。何故だか落ち着く曲なのだ。
　そして弾いた後は決まって蒲鉾が食べたくなる。
　普段、蒲鉾はおろか竹輪すら買わないのに、演奏後数分間に限って無性に食べたくなってしまう。
　食べたい時に食べられるようにと予め購入してみたが、ご飯を食べる頃にはすっかり蒲鉾熱が冷めてしまい、何であの時は食べたかったのだろうと、催眠術が解けた後のような脱力感に見舞われたため、それ以後蒲鉾を購入するのは止めた。
　今日はそんなに蒲鉾は食べたくならなかった。何れにせよ、蒲鉾を食べようが食べまいが、やる気にはさほど支障が出なかったので、気張らない程度の演奏に留めておいた。
　『背ワタ』少々、『蒲鉾帆立』をたっぷりめに練習した後は、明日の弁当のおかず兼今晩の夕飯を作りに勤しんだ。夜はネットサーフィンやら何やらしていたら、床に就いたのは午後十一時半過ぎだった。

　夢の中。今日も昨日と同じ景色を眺めていた。ただ、周囲の空気は昨日のようにどんよりとはしていなかった。雨が降る前の独特のニオイと感覚、それに冷蔵庫を開けた時の冷気に包まれているかのようだった。
　龍月は昨晩と同じ場所同じ体勢で読書をしていた。
　彼女は私に気付くとさっと本を閉じ棚に返した。
「すごい量の本やなあ」
「ほとんど歴史関係だけどね。世間ずれしないように置いてくれたのかもね」
「置いてあっても、うちやったらこれを読もうって気にならへんわ」
「わたしも興味あるの以外は目を通すくらいかな」
「どんな分野に興味あるん？」
「魔力についてかな……」
「魔力」という言葉を聞いた途端私の表情はこわばった。龍月は慌てて補足した。
「ほら、わたしは魔の性質もあるわけだから、力をコントロールできたりするのかなと思って調べてたんだ」
「それなら、使いも『術』っていうのが使えるんやろ？なんで魔力なん？」
「術でできないことが魔力ならできることもあるからだよ。極端な例を挙げると、死んだ人を蘇らせ

るとか……といってもわたしは生粋の魔物じゃないし、屈強な精神の持ち主でもないから自身の心まで魔力に侵食されてしまいそうだけどね」
　どことなく悲しそうな彼女は、声のトーンを落とした。
「そうだ、昨日はごめんね」
「いやいや！ちょっとびっくりしたけど、平気」
　噛みつかれるかと思い怖かったとは言えなかったが、全て見透かすような瞳で彼女は察しただろう。
「後ろにいるのは旦那さん？」
「え？」
　クルリと後ろを振り返ると、そこには仁達が目をぱちくりさせて突っ立っていた。よれよれの千鳥格子柄のパジャマ姿で。
「あれ？何でやろ？」
「くっついたからかな」
「それだけで？」
「昼間のこともあったし、琴音ちゃんを守らなきゃと思って」
　彼の飾らない台詞が心にじんわりきた。
「大切な人を思う気持ちの力かな」
　龍月はふふっと微笑んだ。
「隣で寝てたからやろ……あ、そうそう、今日、日向さんに会ったよ。出会ったきっかけとか聞いて、うちと龍月の魂を切り離すことについても話されたわ」
「そう……あなたはそれで良いと思う？」
「害はなさそやけど、まだ違和感がなあ…」
　私はポリポリと頭を掻いた。
「それに、お父さんやお母さんは結婚するってこと知らんのやろ？話しといたほうがええんちゃうんかなと思って。て言うても簡単に会える人達じゃないから難しいんやろけど」
「うん、そうだね……お母さんへは龍星を通して伝えたよ」
「龍星とも頻繁に会ってるん？」
　龍星とは龍月の父違いの魔物の兄のことである。
「直接は会ってないよ。魔界から天界へ行く道にポストがあって、そこに投函すると魔界の住人に届くんだよ。三、四年くらい前だったかな。その頃から龍星がよく来てくれるようになったよ」
「それ多分、うちがお父さん達に会った時くらいやろ。お母さんにめっちゃ叱られてたからな」
「優しくなったんだ」
「みたいやな」
　私と龍月は同時に顔を綻ばせた。
　私自身を抹消させようとするほどの尋常ならぬ敵対心を持っていた当時と比べると、兄妹の仲は良好になったようで安心した。
「それでお母さんの返事は何て？」

「できればお父さんにも話してあげてね、って」
　そりゃあそう言われるよなと同感だった。
　私の場合、母とは日々の出来事等をたまにメールするが、父とは特別な用事がない限り連絡を取ることはまずない。結婚の話も、彼氏がいるということは母伝えで知っていたとは思うが、私の口から「結婚したい人がいる」と告げた時の父の顔は寂しそうで残念そうだったのは今でも覚えている。
　人間と使いの違いはあるといえど、子を思う親の気持ちは変わらぬものでないのか。
「日向には、お父さんは天界にいるから、会えたら伝えておいてとは言っておいたんだけど、何も聞いてないからまだ会ってないのかもしれない」
「彼も機会があれば報告するとは言ってたなあ。真面目そうな人やし、任せても大丈夫かな」
「なんか、琴音がお姉さんみたいだね。結婚したのは琴音のが先だから先輩夫婦ってことになるのか」
「うちとこは、あまり良い見本になる夫婦じゃないで。まだ三年目で一応新婚やし……って考えたら、世間の先輩夫婦方は何十年と連れ添ってるんやなあ。すごいや」
　話を逸らしてしまった私は何気なく仁達の顔を見た。
「ぼくたちもそうなりたいね」
「あ、うん」
　予想外のコメントに気の抜けた返事をしてしまった。
　全くなんて曇りのない心の持ち主なのだ。それかただ単にボケの返し方がわからなかったのだけか。
　付き合い四年目、まだまだ未知数である。
「日曜日また来るみたいやし、お願いしますってことでええんかな」
「うん。でも、何かあったらまた教えてほしい」
　彼女は懇願するような瞳を向けた。
「うん？変わったことは何もなさそやけど……」
「わたしの杞憂かもしれないけど、長年変化なかったことが数日で急に変わることもあるから」
彼女は何やら思案顔だったが、それ以上探ってはいけない雰囲気が出ていて問えなかった。
「もうすぐ起きる時間だよ……」
　と彼女が知らせてくれる頃には、視界から彼女の姿は遠のいていた。

　今日は私も仁達も朝から仕事である。
　私の勤務先は、「ハコツクール株式会社」という収納用品や生活雑貨を製造販売するメーカーである。管理部通信販売課でパートとして週に三日、午前十時から午後五時半まで勤務している。結婚前から勤めているので今年で六年目となる。
　本社は築約四十年の三階建て。一階は正面玄関から入ってすぐが業務部、扉を出て階段を数段下りると倉庫に繋がっており、手前に小物商品倉庫、奥に大物倉庫がある。その隅に通信販売課、通称「ネット室」のスペースが割り当てられている。
　私が入社した年に改装されたので、社内では一番新しく綺麗な部屋である。八畳ほどの部屋に事務机が四台。衝立で仕切られた隣の部屋は簡易撮影スタジオとなっており、商品企画部の人達も撮影を

しに時折訪れる。

課員数は私含め二名。もう一人は雁野友志(かりのゆうし)さんと言い、ネット室のリーダーで、売上促進対策、受発注注管理や出荷指示業務等全般を行っている、白髪交じりの気さくなおじさんである。

直属の上司は別の部屋に席があり、この部屋には滅多に顔を出さないので、注文殺到など切羽詰まった状況に陥らない限りゆるゆるした環境で仕事ができる。

午前中は商品サンプルの組み立てと撮影を行い、午後からはパソコンに向かっていた。

カタカタとキーボードを入力する音が響く。

表ソフトに商品名や価格等をひたすら打ち込んでいくだけの作業。サンプルの箱を組み立てたり、画像加工、編集をするのは発想力を広げられて楽しいのだが、商品を販売する上で必要不可欠な商品スペック入力は波に乗らないと作業が捗らなかった。

（目痛いわ～肩も凝るし……）

私は瞬きを何度もしながら左手で右肩を揉んだ。

長時間座りっぱなしでパソコン作業は疲れる。壁掛け時計を見上げると、時刻は午後五時をまわったところだった。ラストスパートをかけようと取りかかろうとすると、ガラリと部屋の引き戸が開いた。

入ってきたのはスーツ姿に眼鏡をかけた小太りの男性だった。

「あらら、お疲れー？」

デスク前を通り過ぎた利根さんが軽いノリで私に声をかけた。

利根真己(とねまさき)さん、情報システム部所属のシステムエンジニアで私よりも十歳上の既婚男性である。裏表ない人柄が社内では評判で、入社時は通販事業部に所属していたため私とも仲が良かった。

異動になってもほぼ毎日理由をつけて現れる。彼にとってはネット室は休憩所みたいなものらしい。

ベルトの上に乗ったお腹の肉が日に日に膨らんでいる気がする。

「恋煩いです」

正確に話すのが煩わしかった私は思いついたことを述べた。すると利根さんは、

「え、ついに！来た？倦怠期！」

決定的現場でも目撃したかのように目をキラキラと輝かせた。

「違います。ウソですよ。しかも何でそんなに嬉しそうなんですか？」

「いや、新婚の浮かれてる人みるとちょっと嫌悪感が沸いてくるんだよ。リア充このやろう！みたいな」

「浮かれてないし、利根さんもリア充ですやん」

「あはは～そうだったね。でも、あの頃の新鮮な気持ちはもうないからね～それが普通だし、今でも幸せだけどね」

さりげない幸せ家庭自慢に私が内心「リア充このやろう」と呟いていた。

「そいや、利根さんとこって娘さんいましたよね？」

「うん、上の子がもうすぐ八歳。お嫁に行くって考えただけで泣けてくるわ」

「早くてもあと十年後じゃないですか。悲しむには早すぎません？」

「十年なんてあっという間やで。自分も振り返ってみ」
　促す利根さんの言葉に私は十年前を思い起こしてみた。箏曲部でお箏づくしな毎日を過ごしていた青春時代、また、お稽古に通い始めた歳でもある。
「あの頃は若かったです。毎日何かと忙しくて、勉強、部活、恋愛に一生懸命でしたよ。疲れても寝れば翌日にはすぐ回復してたし。今じゃ結婚したせいか、ドキドキすることもめったにないし、寝ても疲れ取れません」
「それが老いってやつや」
「老いじゃないですよ。まあ、この十年間の経験を経て、自分の中の考え方とか価値観とか変わって成長したんかなと思ってますけど」
「おっ、前向きだね」
「そうですかねぇ……どれだけ後悔があったとしてもあの頃にはもう戻れへんから、じゃあせめてその分、これから悔いのない生き方をしたいなあと」
「へえー大人になったね」
「旦那の影響ですかね。ネガティブ思考やと怒られるので」
「ああ、旦那さん優しくてしっかりしてそうやもんなあ」
　利根さんは納得するかのように頷いた。
　結婚式には彼も招待し、仁達とも会話をしていたのでどんな雰囲気の人物かは知っていた。
　仁達にとって「優しい」はもはや標準装備。道端で人に場所や建物を尋ねられたら、急いでいたとしても懇切丁寧に教える姿を幾度も傍で経験してきた。
「まあ、浮気はしたらアカンで」
「しませんよ」
「恋煩いしてるんちゃうん？」
「冗談に決まってますやん」
「ふふっ、わかってるよ」
　利根さんはにやりと笑んた。
　イラッときた私は無言で冷たい視線を送った。
「戻るわ」
　拗ねた彼は残念そうに踵を返そうとした。
「そうして下さい。一体何しに来たんですか？」
「様子見に。元気かなと思って」
「だいたい毎日顔合わせてますよね」
「現実逃避みたいな？ここ静かやし」
「二人だけですからね。でも、他の部署の人頻繁に来ますよ」
「その人らも休憩しに来てるんやって」
「利根さんじゃあるまいし」
「わっ、ヒドっ！人をサボリ魔みたいに」

「今はサボってますやん」
「ふふふふ～」
　利根さんは含み笑いをした。
　他愛もない会話を、奥のデスクで聞いていたと思われる雁野さんが顔を覗かせた。
「暇なら手伝ってやー」
「僕こう見えて忙しいんですよ。いろんな人にあれこれ頼まれて。いや～デキる男は辛いわ～」
「じゃあ、こっちにも頼まれてよ」
「イヤですよ。可愛い女の子のお願いじゃないと聞きません」
　ダダをこねる子供のようになった利根さんを呆れ顔で見る雁野さん。
　彼は私に視線を向けた。利根さんはジト目で言った。
「言っときますけど、凛堂さんは女の『子』じゃないですからね」
「はいはい。『女の子』は二十五歳までって言いたいんでしょう」
　何回聞かされたことか、この皮肉。
「その通り！っていうか、もうすぐ三十代突入だね！やったね！」
　利根さんは一人意気揚々としていた。
（人が今一番気にしてることを……）
　引っぱたきたい衝動にかられつつも冷静になった。
　親しい間柄でなかったらセクハラで訴えているところである。
「歳のこと言うたら利根さんも四十、おれももう五十やで」
　雁野さんのフォローにも利根さんは、
「女性と男性は違うんですよ。女の子はやっぱり二十代半ばまで。それ以降はドーンと下がる一方やで、ドーン！て」
　憎たらしいことに、上から下へズドンと落ちる仕草までした。
　実に不快だが、彼の言う通り確かに二十五歳を過ぎ始めた頃から、お肌の乾燥が年々ひどくなってきているのは否めなかった。
　現実を知っていても口に出されると、それも異性に言われると打ちのめされそうだった。
「っていうのは一般論であって、全ての人がそうじゃないしなあ。健康や美は毎日の積み重ねで変わるもんさ。凛堂さんはそこそこまだ若く見えるよ。ははっ」
「絶対思ってないですよね、その言い方」
「いやいやそんなことないで～可愛い可愛い」
　へらへら笑う彼に褒められても全然嬉しくなかった。
「うちなんか目立たん地味人やから、歩知（ほち）に旦那紹介してもらわんだら、今も婚活や！って焦ってましたよ」
　歩知は私より一つ下の商品企画部の後輩で、仁達を紹介してくれた子だった。一年前に寿退職した。
「旦那さんも可哀想に。見た目に騙された！って言ってたやろ」
「騙されたとは言ってないですよ。奥ゆかしいイメージとは違った、ってびっくりしてましたけど」

「そうやんなあ～見た目はまあ……中身はどこがやもんな。ぷふふふっ！」
「いっぺんシメていいですかね？」
　彼は無視して雁野さんに同意を得ようとすると、
「まだ我慢しとき」
　と止められた。
「じゃあいつまでも邪魔してても悪いし行くわ」
　結局冷やかしだけで去っていこうとすると
「男前が来たで～！」
　利根さんは面白がって私に知らせた。
　彼と入れ替わりに入ってきたのはななしろまさんだった。
　本名宵蛍（よいほたる）ななしろまさん。利根さん「男前」と表現したように、線が細く爽やで優しい顔立ちのいわゆる塩顔系の男性である。私よりも一つ年上で、商品企画部一課に所属している。
　彼は自社製品である撫子色の取っ手付きボックスを抱えていた。
「撮影ですか？」
「うん、小物だから上のデスクで撮るんだけどね。アクセサリーとか可愛い雑貨を借りていってもいいかな？」
「はい、どうぞ。その箱、女子力万歳なデザインですね」
　遠目からは気付かなかったが、箱の縁にはキラキラのビジューで彩られ、正面にはバラ柄の刺繍、取っ手もリボン型と乙女チックな商品だった。
「ああ、これはブライダル特集に載せる商品だから。女性目線の方が絶対良いのに、それだと偏って斬新さがない！って間宮（まみや）さんに言われてさ……小物選びと撮影は任されたわけ」
　ななしろまさんはふうとため息を漏らした。
　間宮さんは一課の課長、即ち彼の上司である。三年前に入社して以来、腕利きの営業職として一目置かれている存在らしい。
「ななしろまさんのセンスならヘンテコなことにはならんと思いますよ」
「はは……無難にまとめることにするよ」
　彼は苦笑いをしながら隣の撮影スタジオに行った。
「あ、メタルラックに乗ってる花柄の小さい引き出しです」
　私は撮影小物の在りかを教えるために彼の後を追った。
「ここです。取り出しづらいですけど……」
「ありがとう～使い終わったらすぐに返しにくるから」
　ななしろまさんは備品引き出しから、パール調のネックレスやらレースのハンカチ等使えそうな小物を、持参したボックスに丁寧に納めていた。
　私は何となしにその様子を見つめていた。
「結婚した当時を思い出しますね……」
「まだ三年目じゃないか」

「もう三年目ですよ。近々知り合いが結婚するんですけど、わけあって親には伝えてないらしくて」
　私は遠回しに龍月のことを彼に話した。不思議と悩みがあると自然に話せてしまう人なのだった。
「結婚は当事者どうしの問題っていうけど、やっぱり親にも祝福されたほうが良いよ。自分の両親がそうじゃなかったから。不運に見舞われたときに、あの人と結婚したからだ～とか、全然関係ないのに、いちゃもんつけられたりするんだよ」
「ああ、たまに聞きますね。そんなこと後から言われてもどないすんねん！て気がしますけど」
「誰も将来のことなんてわからない。けど、ある程度その人と結婚したら、こうなるだろうなってだいたいの見当はつけておかないとね。その覚悟があれば、周囲に反対されても強く生きていけるんじゃないかなって思う」
「ふーむふむ」
「オレはそこまでするなら結婚なんか辞めるって言うかもしれないけどね。」
　核心をついている話し方に私はうっかり聞いてしまった。
「ななしろまさん結婚してないですよね？」
「うん、そうだけど……」
「彼女は？」
「いないよ」
　さらりと言ってのける彼に「もったいねえ！」と叫びそうになった。
「既婚者の意見みたいでしたよ」
　その達観した話し方に驚いた。
「まわりの人が結婚するの見たり、聞いたりして考え方が変わってきたのかもしれないなあ。そろそろいい歳だしね」
「いい歳って、男の人は三十代半ばくらいまでなら需要有りますよ」
　私は根拠のないデータで彼を励ました。
　年齢がどうのより、老若男女問わず好意を持たれるタイプの彼ならば、すぐに相応しい相手は見つかりそうだと睨んでいる。ただ、どことなくふわっとしているというか、掴みどころがない感じもする。
「そう思っとくよ。ふう、これくらいで良いかな」
　彼は撮影用小物でいっぱいになった箱を持ち上げた。
「じゃあ戻るね。失礼しました～」
「はーい」
　ななしろまさんは軽い足取りで部屋を後にした。
　私はもう一度壁の時計で時間を確かめた。針は五時三十五分を指していた。
　キリの良いところで作業を終えようと席に着くと、「ちょっと待ちなよ！」という怒鳴り声が響いてきた。
「何や何や？」
　画面に集中していた雁野さんも気になったのか、席から立ち上がり戸を開けた。私もそっと後につ

いていった。
　倉庫を隔てた正面の通路には女性が三人立っていた。
「何で黙って帰ろとしてるん？」
　眉間に皺を寄せて腕組みをしているミディアムストレートヘアの女性――商品企画部一課課長の間宮花織（まみやかおり）さんだった。歳は三十八歳だったか。小学生の娘が一人いると数か月前本人が話しているのを聞いたことがあった。
　砥粉色のジャケットに苔色のスリムパンツという服装が二十代のような若々しさを際立たせていた。
「定時過ぎてるんですけど…」
　間宮さんの正面にいるのは新人と思しき二名の女子。
　まだどことなく学生の雰囲気が残っている彼女達はおどおどしていた。
「普通挨拶して帰るもんやろ。っていうか、まだ仕事残ってるんやけど」
「指示されてた分は終えました」
「残業はよくないって聞いたので」
　口を揃える二人に間宮さんは大きな溜息をついた。
「そりゃ、それが理想やけど、きっちり終わることなんて滅多にないの毎日来ててわかってるやろ」
「定時になって特に何も言われなかったので……」
「言われんと気付かんの？バイトとちゃうんやで。皆忙しそうにしてるのに」
「でも、私達にできることなんかないかなって思って」
「そういう時は聞いたらいいやん。何か手伝えることありますか？って。そしたら、できそうなことを手伝ってもらうからさ」
「はい……」
　新人達は理解したようがまだ不服そうな顔をしていた。
「言いたい事あるならはっきり言いなよ」
　歯に衣着せぬ言い方できっと睨みつける彼女に、新人達は明らかに震えあがっていた。
「まあまあ、そんなに叱らんでも」
　険悪なムードを見かねた雁野さんが三人の前に出て行った。
「私だって叱りたくて叱ってるわけじゃないんですよ。はあ、今日はもう帰っていいよ。お疲れ様」
「お疲れ様です……」
　新人達は浅く会釈をすると逃げるようにそそくさと帰って行った。
「教育係も大変やなあ」
「本当に！学生気分が抜けてないんか知らんけど、それでも勝手に帰るとかありえないですよ。あんまりきつく言ったら、へこんで次の日休む子もいるから控え目にはしてるつもりですけど、接し方が難しいです」
「少しずつ慣らせてかなしゃあないって」
「新人の間では私、怖い人のイメージついてるからなあ。私のおらんとこで『あいつマジうざいわ～』とか言われてるんやろか。うう、結構ショックやわ……」

「元気出してください……！」
　額に手を当て泣き出しそうな間宮さんを見て、居ても立っても居られなかった私は部屋を出た。
「凛堂さん」
「あかんことはあかんってきちんと指摘してくれる人は必要ですよ。怒られた本人はその時は落ち込んだり、ムカついたりするかもしれませんけど、後になって良かったなあって思ってくれるはずです」
「……そうかな」
　彼女は顔を上げて微笑んだ。
「私も新人時代は、ぼけーっとしてたんですけどね。まあ、今でもそうですけど。私の時はきっぱり言ってくれる先輩や上司がいなかったので、別の職場で指摘されて身に着いたって感じですかね。」
「あの子らもわかってくれてるといいけどね。ってか、凛堂さん若いのにしっかりした考え方やね」
「えっと、もうそんなに若くないですよ」
「まだ二十代やろ？」
「かろうじてですね。今週末で三十歳です」
「そんなの私からしたら若者の分類に入るって！」
「そうなんでしょうか……新人の子ら見るとあんな若々しかった頃もあったんやなって懐かしく思うことばかりですけど」
「体力は落ちるけど、精神的には成長してる段階ってところかな。それ言うたら私もなんやけど……まあ、三十五過ぎたら体のあちこちガクンとくるからな」
（二十五歳の次は三十五歳か。十年ごとに関門がくるんか）
　利根さんの「女子二十五歳まで説」が頭をよぎった。
「凛堂さんは大丈夫そやけど、なんなら指導係任せようかな～」
　彼女はにかっと笑った。
「そ、それは困ります！」
「うそうそ。そんなんしてたら部長にどやされるわ。また気付いたこととかあったら言ってあげて」
すっと立ち上がった間宮さんは深呼吸すると、
「あともうひと頑張りするか！ありがとね」
　明るい笑顔で階段を上がって行った。

　勤務を終え会社を出ると辺りはすっかり暗くなっていた。先週あたりからめっきり冷え込み、街路樹のイチョウも黄葉したかと思っていたのに既に落葉が始まり、歩道周辺は黄色い絨毯でも敷かれたかのように鮮やかだった。
　私は積もった葉をワサァッと音を立てて蹴り飛ばしながら歩いていた。通勤路には会社の表玄関から数十メートル行ったところに自動販売機がある。
　夏季はナタデココジュース、冬季はおしるこやコーンポタージュ等と、どこの自販機にもおなじみの飲み物が陳列されているのだが、ときたまどえらいものが販売されている時があり、最下段右端に固まっていることが多いので、勝手に「イロモノ枠」と呼んでいる。

例えば「爽やかところてん黒蜜味」とか、「まろやかあんみつ味」とか、何年か前には「すっきりみたらし団子味」とか、なぜか和菓子で攻めてくるのが好きなようで、視界に入ると好奇心が勝り、ついついお金を入れてボタンを押してしまう。

肝心の味といえば、多少の味の違いはあるといえど、総合的に甘すぎる飲み物である。

ホットな新商品があれば飲んでみようと歩き進めていると、既に問題の自販機の前には一人の男性がいた。ちょうど飲み物をどれにするか人差し指を前に出して選んでいた。

上段左端から順に目で追っていたと思いきや、最下段右端ではたと動きを止めた。そしてほんの数秒後、中段あたりのボタンを押し、取り出し口から缶を取って去っていった。

私は不思議に思いながら自販機の前までやって来た。

何の変哲もない飲み物達——のうちに明らかに一つ異様な物が混ざっていた。

ミカン色の缶には、きなこもちのイメージ画像と白く丸い文字で「なめらかきなこもち味ジュース」とあった。更に缶の右斜め上からは飛び出しポップとでもいえばいいのか、立体的な吹き出しに「在庫限り！」と書かれ存在感をアピールしていた。

（「在庫限り」って自販機で使うキャッチフレーズなんやろうか）

余程売れないのか、あるいは売りたいのかは別として、目に留まったからには買うしかないという謎の脅迫観念にとらわれた私は、自然ときなこもち味ジュースのボタンを押下していた。

取り出し口から出てきたジュースを手にとった。あったかい。

缶のタブを起こした。プシュという音とともに、もくもくと湯気が立ち上る。

くんくんと匂いをかいだ。きなこの香ばしい匂いが食欲をそそる。

（結構いけるんちゃう？）

私は勇気を出して飲み口からくいっといった。

ゴクン。

（うん、甘い！）

この期待を裏切らない甘ったるさ。逆に清々しく感じられ思わず声を上げて笑い出しそうになった。

粉末のきなこも入っていたのか、最後はやっぱり缶の底に溜まり、ポンポンと底を叩くと濃厚なきなこジェルが塊になってどろりと一気に口の中に入った。

（お茶が飲みたい）

喉を潤すはずだったのに、喉に変なものがへばりついた感触が残り不快感極まりなかった。

（早く帰ろう）

私は空き缶を傍のゴミ箱に捨てると、さっさと歩き始めた。

もうイロモノ枠は絶対飲まない！と心に決めたはずなのに。毎回「今度こそは大丈夫！」と期待して買ってしまう。別に不味くはないけれど、飲み物で売り出す物ではない味と食感なのである。

これでよく売れているものだとよくよく考えてみたら、「在庫限り」と書いてあったのは、人気商品で次回入荷未定という状況だけではなく、全く売れず、次回製造中止または終了の状況でもありうるのだ。

（まんまと騙されたわけか……）

というのは嘘で、ただ私の珍しい物好きさへの誘惑に勝てなかったことが招いた結果だった。
　これを教訓に、今後は絶対買わない、誘惑に負けない！と決意を固めた。
　歩くこと約十分、最寄駅を目の前に信号待ちをしていた時、何気なく斜め向かいにある喫茶店を眺めていた。オープンテラスのある和風テイストのカフェ「キュイモス」
　この時間帯は下校時の学生や、外出先での休憩タイムのサラリーマン達で賑わっている。
　テラスではティータイムを楽しんでいる人もちらほら見かけた。暗くなると植え込みのライトがぼうっと灯り、柔らかく仄かな明かりが幻想的な空間を造り出していた。
　私は優雅なティータイムに憧れを抱きながら、しばらくして信号が青に変わったので、横断歩道を渡ろうとし始めた時だった。
（あれ？）
　頭の中を何かがかすめた。
　不意に視界をカフェに戻すと見覚えのある姿が映った気がした。とりあえず足早に横断し、駅とは逆方向のカフェのテラス席出入口まで近づいた。
　店内出入り口に近い席に、一人の若い男性が座って本を読んでいる横顔が目に飛び込んできた。
　外見は三十過ぎくらいか。涼やかな目元に鼻筋の通った顔立ち、今時の若者流行りのゆるふわパーマをスタイリッシュにセットした髪型、ピンストライプが入った紺色スーツ――
（間違いない！）
　確信を得た私はカフェテラスの出入口階段を上がり、ゆっくりと歩を進めた。距離が縮まる度にかぐわしい花の香りが漂って来た。
「あの……」
　私はおそるおそる声をかけた。
「あ、琴音久しぶりだね。元気にしてた？」
　男性は読んでいた本をパタンと閉じるとにっこりと笑った。マリンブルーのピアスがキラリと光る。
　彼は龍月の父のメルフィーユだった。
「おおお、お久しぶりです。お父さん！」
　吃った上に初めての呼び方をしてしまい口をつぐんだ。
「間違いではないけど……紛らわしいんじゃないかな」
「うちの父はおとんって呼んでるので大丈夫です……あ、でも、旦那の父はお義父さんなので紛らわしいですね。メルフィーユさん……長いかな、あっ、じゃあ、メフィさんって呼びます……」
　私はアハハハと笑った。
　数年ぶりの予期せぬ再会に驚きと緊張で焦っていた。
「気付いてもらえなかったらと思って、仮の姿でも少し使いの気配を残しておいたんだよ」
「いや、もう一目でわかりました」
　繁華街ならまだしも、こんな郊外に洋風お洒落バーにいそうな美形が現れたら目の保養に数秒間は見惚れてしまうだろう。
　仮の姿というのは、実は今の姿は地上界へ赴く際の人間の姿であり、本来の使いの姿とは異なる。

使いは殆どが人間と同じ見た目をしているが、中には髪や目の色や体型等著しく異なる者は姿を変えて下りてくるらしい。
「変わらないですね、四年前と」
「琴音もね」
「いや、うちは下降する一方です」
自嘲気味に笑う私に彼は微笑んだ。
「そう？一段と綺麗になったと思うけど」
「……ぶふぉっ」
私は思わず変な声で吹いてしまった。
「え？どうしたの？大丈夫？」
「何でもないです……」
天然たらしか。昔の私ならキュンとときめいていたところだろうが、今は気遣ってもらってすみませんと恐縮し苦笑いするしかなかった。
（でも、前とちょっと変わったような）
「何か前と雰囲気変わりました？」
「スタイリストのお勧めに変えてもらったんだ」
「スタイリスト？」
「使いは人間と接触する用事で地上に下りる時、人間らしい姿かどうかを身体検査されるんだ。そこで引っかかったらスタイリストが直してくれるわけ。僕の場合、昔から髪の毛がダメって厳しくて。その時代の流行りに合わせた髪型にセットしてくれるんだよ。この数年でもわずかに変わってるみたいだね」
「へえ～すごいなあ。流行りを熟知してるんですね」
「年輩の女性で腕は確かなんだけど、毎回やたらべたべた触られるのがちょっとね……」
彼は苦虫を噛み潰したような顔だった。
どの世界でも、若くてカッコいい男性を触っても許されるのはおばちゃんの特権なのか。
「琴音も髪伸びたね」
「これは……結婚式前にずっと伸ばしてたんですけど、終わった後も特に思い切って切ることなかったから自然と長くなってました」
私は自分の髪の毛を引っ張った。ばさばさ毛先のポニーテールがぴょんとはねた。
「そういえば結婚したんだね。おめでとう」
「ああ、そうです。もう三年目ですけど」
相手も周知の上で話していたが、そういえば、彼には何の報告もしていなかった。というかする術がなかったのだが。
「今日はいかがされたんですか？」
すると彼はぷっと笑いだした。
「何そのぎこちない敬語。前みたいに気楽に話してくれていいよ」

「あれ、そうやったけ？四年も経つと忘れるようで」
「僕のことは忘れてなかったみたいだけど？」
「それは、気配とお父さんレーダーが自然と発動したんじゃないかと……いわゆる心の目みたいなもの？」
「なるほど、ありがたいことだ」
　黄色い声で騒ぐうら若き女子ならころっと引っ掛かってしまうような容姿のため――とは決して口にできなかったので、曖昧かつな発言をしたものの彼は嬉しそうに顔を綻ばせた。
「よかったら、ここ座りなよ」
「ありがとうございます。その前に水もらってきます」
「水でいいの？」
「はい、あ、うん。喉のきなこもちが気持ち悪くて……」
「喉のきなこもち？？」
　彼は目が点になった。
「ああ、いやいや、口の中が甘ったるいんで、あはは」
　私は返事をすると、さっと店内へ入り、中央に設置されている「どなた様もご自由にどうぞ」と貼り紙がされた無料のウォーターサーバーまで赴き水を汲みに行った。
　再びテラス席に戻ると、メルフィーユはコーヒーカップを片手に寛いでいた。あまりにも絵になり過ぎていて記念に一枚撮りたいくらいだった。
　テーブルに紙コップを置いた私はショルダーバッグを椅子の背もたれに置いてから腰掛けた。
　そして、水をぐびっと一杯。ああ、潤った。無事に喉にへばりついていたきなこもちが剥がされ、ふうと安堵の息を漏らした。
「地上へ来たのは結婚のことですか？」
「そうそう、お祝いまだしてなかったと思って」
　彼は思い出したかのように、手をぽんと叩いて、隣の椅子に置いてあったビジネスバッグを手に取り何やらごそごそし始めた。
（もう報告済みやったんや、よかった）
「これ、どうぞ」
　手渡されたのは、白いチャック付き袋。
　ドラッグストアで販売されているビタミンやミネラル等のサプリメントのようなものだった。
「リリフ 4193～天からの恵み～」という文字とともに、双葉を象ったと思しきファンシーなキャラクターのイラストが描かれていた。
「リリフよんいちきゅうさん？」
「『良い草』だよ。地上でわりと人気のサプリって聞いてるけど、ハッピーソウ会社って知らない？」
「聞いたことあるようななないような。その会社で作ってるんですか？」
「社員の中に元使いが何人かいてね。天界で採取されたリリフをここの工場で加工してるんだ」
「へ～」

「元使い」というのは、地上界で生活を送っている使いのことを指す。
　使いは人間に近い存在なので、天界か地上界か生活圏を選ぶことが出来るらしい。
「どんな効き目があるんですか？」
「リリフはエコリ様が育てられている薬草の一つで、天界では広く愛用されているんだよ。主に解毒、浄化剤として使われているんだけど、人間に不足しがちなビタミンやミネラルを含んでるってことで、昨年から地上でもサプリメントとして販売されるになったんだ。ストレス社会、忙しい現代人の健康に役立てるはずってね」
「天界でも営業活動ってあるんや……」
　私が感心していると彼はハハハと軽く笑った。
　エコリ様とは彼が仕えている神様である。
「営業ってほどでもないかな。たまたま人脈と機会と運とが重なった感じ。本当はもっと別の品を用意しようと思ったんだけど、機能的な物のほうが良いかなと思って。三袋あるからまた飲んでみてね」
「良さそうならまた買ってみます。ありがとうございます」
　サプリ袋を手渡された私はまとめてカバンの中へ閉まった。
「そういえば、指輪付けてないんだね」
「あ……指にはめるのって何か落ち着かんくて。結婚指輪ってそれなりにするから、それやったらお箏買うてほしいって言いました」
「琴音らしいや」
　彼は笑いをこらえていた。
「冗談のつもりやったのに、旦那は『いいよ』って言ってくれて」
「優しい人じゃないか」
「優しすぎるんですよ。機嫌悪くなっても絶対向こうから謝ってくれるし、昼寝してる時に練習してても怒らんし、こんなうちと結婚してくれてありがとう！て感謝せなあかんくらいなんですよ」
　だんだんと右手でテーブルを叩く私は段々鼻息荒くなっていた。
　彼は興味深そうに聞いてくれていたが、このままでは私の結婚生活幸せ自慢で日が暮れてしまう。
　緊張もほどよく解れたところで、龍月のことについて切り出した。
「ところで、龍月も結婚するんですよね？おめでとうございます」
「え？龍月が結婚！？」
　彼はクールな面に似つかわしく無い素っ頓狂な声を上げた。
「あれ？そのことで地上に来たんじゃ？」
　ものすごく気まずい雰囲気になってきた。
「知らないよ。誰に聞いたの？」
「聞いたのは本人から。一昨日、婚約者の人から手紙が送られてきて」
「婚約者って？」
「日向さんです。千冨玲様の使いの日向物素さん」
「日向物素……！？」

（ひいぃ～！何やこの憎悪オーラは！怖い！）
「し、知り合いですか？」
　険しい目つきになった彼だったが、私が恐れているのを察してか彼は少し表情を和らげた。
「後輩だよ。十年ほど前ではエコリ様に仕えていた。奴とも会ったのかい？」
「昨日家に来ました。婚約報告と私から龍月の魂を分離する方法とか一通りの説明を。夢逢石っていう石をもらって、それを置いて寝たら夢で龍月に会えたんです」
「夢逢石？魂を分離する？」
「可変物体とかいう体となる器に龍月の魂を入れるとか。うちは別の型の合う魂を入れてもらう……うちが主体やから二つの魂を切り離しても問題ないって……って、どうかしました？」
「そんなことを……あいつが」
　彼は怒りに唇をわなわなさせていた。
「機会があれば伝えるって聞いたので、てっきりもう知ってるのかと思って」
　私は変な汗が背中を伝うのが分かり思わず
「すみません」
　と謝ってしまった。
「琴音が謝る必要ないよ。予想もしてなかったからびっくりしただけで。節目には何かとあるものなんだね」
　節目というのはおそらく三十年目ということだろう。
　彼は必死に動揺を隠すように何度も深呼吸していた。私が彼と同じ立場ならここまで冷静ではいられない。本人から告げられる前に他人に知らされるというのは結婚以外でも微妙な心境になるものだ。
　息を整えた彼は元の穏やかな表情に戻った。
「龍月はどんな子だった？」
「黒髪に碧色の瞳で……目鼻立ちくっきりしてて、お肌も白くて綺麗でしたね」
「美弥（みや）に似たんだね」
　美弥というのは龍月の母の名前である。
　容姿はウェーブがかった黒髪に深い碧の瞳で、包み込むような優しい印象の人物だったと思う。
「全体的には……でも、横顔とかふとした表情はどことなくメフィさんに似てるなあって感じましたよ」
「そうなんだ……」
　彼は寂しげに視線を落とした。
　私の中の龍月像にすぎないとしも、娘の姿を人づてにしか知ることができないというのは悲しいものである。と私はそこで一つの考えが浮かんだ。
「夢逢石があれば、メフィさんも龍月と会って話せるんじゃ？日向さんもそれを持ってたから彼女に気付いたわけやし」
「夢逢石は幻の石と言われるほど貴重な石なんだ。今の天界で夢逢石を作る技術を持ち合わせているのは千冨玲様のみ。魂と交流できることを目的に作られたけど生成方法が難しいと言われていて、作

られてもほんの数量だけ。昔、一度見せてもらって以来実物は目にしたことないよ。天界から魔界へ赴く際も、神様の許可がない限り使いが自由に出入りできる所じゃない。それに、千冨玲様は神出鬼没というか、一か所に留まっている方じゃないからすぐにお目にかかれないんだよ」
「日向さんは、もともとはエコリ様に仕えていたんですよね」
　日向について尋ねようとすると、メルフィーユは意味ありげにこちらに視線を合わせた。
「日向は特に向上心がある子で、同年代の後輩達の中でもてきぱきしてて、リーダー的存在だった。僕とも仲は良かったほうだった。リリフを育て始めるまでは……」
「メフィさんが育ててるんですか？」
「中心となっているのは、エコリ様に仕える若い使い達だよ。リリフは天界でも辺鄙な所でしか生育できなくて。栽培地に辿り着くには九三二九六段もある大階段を上り下りしないといけないんだ」
「きゅうまんさんぜん……段！？」
「使いは飛べるから苦じゃないけど、気は滅入るかな。天界の気候で空気、光、温度の三つは自動的に維持できるけど水遣りだけは毎日行う必要がある。管理の面でも毎日様子は確認しに行くべきだと交代で任せていたんだ。でも、今の若い子は地上界の見回りとか、自由に飛びまわれる役割を好む傾向があって、そのうち何日も水遣りに行かない日が続き、とうとうある日リリフが枯れてしまう事態が起きたんだ。その時たまたま叱った相手が日向だった。『自分の当番の日はきちんと行ってます。他の奴の方がやってないのに、どうして自分だけが怒られないといけないんですか？』って逆ギレされて、それ以後ぎくしゃくした関係になってしまって。そのうち天界でちょっとした混乱が生じた最中、彼は忽然と姿を消してしまったんだ」
「それ、完全に自分のせいですよね。リーダーならサボってる人を注意するべきやろに」
　私は退勤間際の間宮さんと新人達のやり取りを思い起こした。
　地上界も天界も変わらないものなのか。はたまたそういう時代なのか。
「キツい言い方だったかなとは思う。でも仲間内のもめごとなんて多々あることだし、いつまでも根に持つほどのことでもないよ」
「本人にしたら辞めたいくらいに許せやんことやったんかも。プライドが高い人って、他人の無意識の一言でも『傷つけられた』って思い込んでしまうこと多いような気がするんですよね」
「自負心が強い子だったから不安もあったけど」
「見事に的中か。うちがもらった夢逢石を使って、直接龍月に話を聞いてみるのは？」
「それは遠慮しとくよ。父親らしいこと全くできていないのに、突然現れて『あいつはやめとけ！』なんて言う資格はないよ」
「ずっと天界から見守ってたんでしょう？なら一度会うだけでも……」
　と言いかけてやめた。龍月の「父に会ったら殴ってしまうかも」と本気めいた冗談を思い出したからだ。
「どうしたの？」
「いえいえ、それぞれいろんな事情がありますからね……はは」
　私は笑って誤魔化した。

　感動の父と娘の対面が娘の右ストレートで全て台無しになる危険性も無きにしも非ず。
「そう……あ、魂分離についてだけど、型の合う魂どうしでも必ず結合できるとは限らないんだよ。琴音の魂と結合できたのも龍月が君を選んだから。魂結合の条件は同型であることともう一つ、その魂が相手を選ぶということだ」
「じゃあ、くっつく魂は相性が良い相手がわかるってことなんですね」
「その準備されている魂が琴音を選んでくれたらよいけど……」
「合わんだらボツやん」
　一気に雲行きが怪しくなってきた。
「この計画は止めるべきだよ」
「え、でも、龍月が体を入手できるチャンス……そうしたら、うちは龍月とは離れてしまうことになるんか」
　急に寂しい気持ちになってきた。
「泣きそうな顔してるよ」
「実際に対面したのは三日前で日も浅いけど、生まれてからずっと一緒にいてくれたと思うと寂しいなあって……龍月のためやしお祝いしてあげな！って日向さんに協力しようと思ったわけで。それがだんだん複雑な気分になってきました」
「夢逢石についてもう少し情報が欲しいところだね。地上界には半日しか滞在できないから、天界で調べて頭を整理してからまた明日来るよ」
「あれ？連日来られるんですか？」
「今回の件をエコリ様にも報告すれば特別に許可はもらえると思う。ひゅっとは行けないけどね」
　彼は悪戯っぽく笑んだ。
　どこかで耳にした擬声語に私はあれ？と妙に感じたがはっきりと思い出せなかった。
「明日は午後からお稽古があって、三時頃には終わると思います。四時に自宅の最寄り駅のマロ駅で待ち合わせはどうでしょうか？改札出たとこに休憩スペースがあるんです」
「わかった。マロ駅だね」
「本当は自宅にお招きするのが良いんでしょうけど、何分狭い上に散らかってて」
「新婚夫婦のお家に異性を上がり込ませるなんて、旦那さんも心配するだろうから気を遣わなくていいよ」
「あ、そういう意味じゃなくて……旦那は、メフィさんは龍月のお父さんやってこと知ってるし、事前にきちんと伝えとけば大丈夫ですよ」
「お互い信頼し合ってるんだね」
「そんなたいしたもんじゃないですよ。まあでも、日向さんが来た時は、一人やったら入れるか迷いました」
「誰か一緒だったの？」
「お姉さんの芽乃さんと一緒でした。補足説明とかをちょこちょこと。あれかな、男一人やったら警戒されると思って付いてきてもろたんかなあ。どっちにしろ午前中は仁達がいたけど」

「ふーん」
　彼は口に手を当てて何やら思案したが、私の視線に気が付くと、
「ごめんごめん。そろそろ帰ったほうがいいよね。夕飯の支度もあるだろうし」
　あたりを見まわした。
　袖をめくり腕時計をチラッと確認すると時刻は午後六時半を過ぎていた。
「そうですね。旦那も帰って来るし……すみません、今日はありがとうございました」
「こちらこそ。ではまた明日」
　彼はひらひらと手を振った。
　私は席から立ち上がると会釈をしてその場を去った。

　夕飯の野菜盛りだくさんカレーを仁達と一緒に食べた後私は、龍月の父に会ってリリフというサプリをお祝いにもらったこと、龍月の婚約報告を初めて聞いて、しかも相手が自分の元後輩でご立腹だったこと等々を彼に報告した。
「なんか、もうメルヘンやね」
「メルヘンな現実やで」
　何度も話題には挙げていたものの、実際に天界の使いと会ったとか、珍しい薬草を育てているとか聞いてもすぐには受け入れられないだろう。
「とりあえず、これ飲んでみたら？」
「リリフよんいちきゅうさん？」
「『良い草』って読むらしい。ちっこく書いてある」
「ホントや。どれどれ？株式会社ハッピーソウ……聞いたことないな」
「社員さんの中に元使いの人がいるんやってさ」
「ふう～ん」
　仁達は袋を手に取り裏返し、成分表示をじっと見つめた後、封を切ると一粒取り出した。
　ほんのり薄緑に色づいた丸いタブレットを一粒口の中へポイ。
「噛まなあかんで」
　彼はポリポリと噛み出してすぐさま顔をくしゃっと歪めた。
「すご……喉の奥いっぱいにハーブが広がる感じや。目が覚めるよ」
「すーって匂いするわ」
　私も一粒もらって食べると、口の中に爽快感が走った。
「ハーブティー飲んだすっきり感やな。そんなにきつくはないや」
「個人差があるんかな、こういうの好きやよ」
「気に入ったなら毎日飲むといいよ」
「琴音ちゃんも飲んだらいいやん」
「あー、うちはたまにでいいや。そんなに疲れてないし」
「そうなの？家事、仕事、お箏の練習で毎日お疲れじゃない？」

　私はお箏という単語にピクリと反応した。
「真面目にやると疲れるなあ。って、明日レッスンやのに今週あんまり練習してないわ」
「あんなことあったら練習どころじゃないよ」
「先生も鬼じゃないから『練習する時間がなかった』って言えば大目に見てくれるけど、熱心に練習する人って思われてるから、そう言うのも気が引けるというか言い訳みたいで嫌なんさなあ……まあ実際言い訳やけど。もっと忙しいのにきちんと練習してる人もいるんやからな」
「他人のイメージ通りにならんでも、自分のペースで良いんじゃないの？」
「うーん、そうやけど、自分の中で納得いかんっていうか、悔しいっていうか、そんな気持ちが沸き起こってくる。やったらできるのにやらんっていうのはな……まして、好きなことに対してツンケン態度ってどうなん？って思うわけ」
「はあ……」
　彼はあっけらかんとしていた。
「こんなこと話してる間に練習したらええんやんな」
「いいよ、思う存分弾いてね」
「手が痛くならんよう軽く弾いとくわ」
　私は和室に行き、そっと扉を閉めた。
　いつでも弾ける良好状態の練習コーナー。油単をめくり、椅子に座ると楽譜の表紙をペラリとめくった。
　『背ワタ』――曲の解説はともかく、メリハリある曲調が気に入って次の発表会用として選んだ。
　演奏は技術も大切だがイメージも重要である。
「イセエビ食べたい……」
　私はぽそりと独りごちた。
　我が家の食卓に上がるのは数百円で売られている冷凍のむき海老で、イセエビなんて高級食材はその昔、一度口にした覚えがあるけど味は「はて？」程度の記憶しかない。
　イセエビに限定せずとも、美味しいエビならどの種類でもいいから食べたかった。一般庶民には手の届かない素材なので、思いを馳せるばかりだった。『蒲鉾帆立』よりはまだストーリ性があるため想像はしやすい曲だったが、表現に関しては一筋縄ではいかなかった。
　エビの背腸取り等行ったのは、実家暮らしをしていた十数年以上も前のことでほぼ記憶にないし、そんなに苦戦するほどエビを大量に使ってはいなかった。解説には、具体的に何匹のエビとは載っていなかったが、何百匹ともなれば気が狂いそうになるかもしれない。
　入浴しても手についたエビ臭が取れない。寝ても夢に現れたエビが執拗に追いかけてくる――なんて悪夢。等とイマジネーションを膨らませすぎて、「エビの背腸取り」よりも「エビとの共同生活」に内容を変更した方がしっくりくるのではないかとケチを付け始め、最終的には料理人とエビが仲良く手をつないで笑っている像が思い浮かんだ。
　すると「たはは」と空虚な笑い声が漏れ、練習をして共感する度に、じわじわとエビ色に染まっていく自分を受け入れることが出来たのである。

そんなこんなで今日の練習は明日に備え二回通して止めた。

お稽古日。お箏の先生の自宅玄関前。

私は気を引き締めてインターホンを鳴らした。

「どうぞ～」

軽やかな声が響き、私は門扉を開けて玄関前に着くと中からドアが開いた。

「こんにちは」

橘先生がにこやかに出迎えてくれた。

橘未華子（たちばなみかこ）先生。学生時代から十年以上もお世話になっている先生である。

実年齢はおそらく還暦はとうに過ぎていたはずだったが、小柄で可愛らしい容姿ときめ細やかなお肌のため少なくとも十歳は若く見えた。

私は靴を脱いで玄関に上がると、左手にあるお稽古場に入った。

八畳の和室には、壁際にお箏が三面、三味線が二丁立てかけてあり、楽譜やＣＤ，カセットテープ等の音源が詰まったカラーボックスが三つ、床には書いて消せるペン、タコ糸、色鉛筆、サージカルテープなどの細々した物がカテゴリーごとにかためられてはいるものの散乱しており、整頓好きの私には片づけたい衝動に駆られる光景だった。

毎度あまり気に留めぬよう努めていたが、先生が「あれどこだったかしら？」とガサガサと物探しをしているのを目にする度、お稽古そっちのけで「片づけます！」と挙手したいくらいだった。

爪をはめ、椅子に座り、調弦を取り直し、演奏準備が出来た私は、

「宜しくお願いします」

先生にお辞儀をしてから弾き始めた。

私は昨日の「自宅でエビ祭り」のイメージを再現しようと丁寧に一曲弾き終えた。

「う～ん、良いんだけど、ゆったりとしたとこがちょっと元気すぎないかしら？」

「そういわれてみれば……」

祭りを意識しすぎて静かな部分まで突っ走ってしまっていたことに気付いた。

「んじゃあもう一回」

「はい」

私はもう一度始めから弾き始めた。

（急がずに……）

出だしからいきなりクライマックスのような激しく速いリズムがしばらく続いた後は、ややゆったりした部分に入る。適度なテンポを保ちつつ、小さいけれど爪先に力を入れた音で。細心の注意を払いながら音を奏でる。

やがて再び主題に向けて盛り上がる。はじめと旋律は似ているが、より細かく伸びやかに生き生きとした感情を込める。

（よし、今のとこいい感じ……）

先生にストップをかけられていないところを見ると今のところは問題ないと見て良いのだろうと、

チラリと視線だけ先生の方にやると、箏を前に楽譜に注目している先生の首がかくかくしていた。
（もしや、寝てる？）
　聴いているだけだと眠気に襲われるのは当たり前。
　けれども、お稽古中に眠たくなって良いのだろうかと余計なことを考え出したら、ある部分で絃に上手く引っ掛からずつまづいた。特に注意されなかったので、同じ所を弾き直して先に進んだ。
　左手で弾(はじ)き、最後の和音を弾き終え、響いている絃をそっと両手で消した。
　私がパッと顔を上げるのとほぼ同時に先生もゆっくり頭を上げた。「ふぁぁ」と小さく欠伸をした。
「……えっと、途中のとこ間違えてたけど、たまたま？」
「は、はい」
「あと、ゆっくりのとこ、一拍の休みが短いかな。もう少し間を取ったほうが良いと思う」
「はい……」
　私は楽譜を手に取り注意されたことを鉛筆で楽譜に素早く書き込んだ。
　先生はうとうと眠りかけているように見せかけて、耳だけはしっかり音を拾っているというスゴ技の持ち主だった。経験を積むと私もそうなれるのだろうか。
「そんなとこかな～だいぶ良くなったよ」
　機嫌よく笑う先生に私はホッとした。
　全然弾けない時や、毎回注意されているのに直っていない時の厳しさに比べるとこの頃は穏やかである。
　書き込みを終えた私は、もう一度通して演奏した。次回もこの調子でということでお稽古は終了し、その後は時間があったので休憩タイムになった。
　ダイニングから和室に戻ってきた先生は、おぼんに乗せていた湯呑とおまんじゅうらしき和菓子が乗った小皿を私の前に差し出した。
「ありがとうございます。いただきます」
　湯呑に口を近づけるとふうふうと冷ましてから一口飲んだ。
　おまんじゅうを片手で掴みかじる。口の中にほんのりとお酒の味が広がった。
　私は龍月の件を先生に相談しようか迷っていた。
　先生は私が彼女のことを伝える前から知っており、四年前の事件も報告済みだった。人生の先輩としての意見を聞くべきではないかと打ち明けることにし、湯呑を置いた。
「またえらいことに巻き込まれてしまって……」
「なになに？」
　先生は興味津々で私を見つめた。
「龍月……うちの中にいるもう一つの魂ですけど、その子の婚約者を名乗る使いが水曜日に来たんです。うちと彼女の魂を分離させて、彼女の魂を新たな体に取り込む方法があるらしくて」
　私は事の顛末を話した。先生はふんふん、へ～と相槌を打ちながら聞いてくれていた。
「上手くいくんかなーって心配なんですよね」
「そーなの？」

　先生は驚愕することもなくあっさりした様子だった。
「魂の分離とかよくわからないけど、これだけ一緒に生きてきて何もなかったんだったら、彼女はあなたの一部として存在してるってことでしょ。あなたが彼女にいてほしいと思うならそれでいんじゃない？」
「でも、彼女は好きな人と一緒に暮らしたいって思ってそうやし」
「それならもっと早く手を打ってるんじゃないかしら」
「手段がなかったからじゃないでしょうか。準備期間十年っていうのは気長やなとは感じましたけど」
「じゃあ、彼女もそれほどは強く思ってないってことよ」
「そうなんですかねえ……」
「悩みを話せることは、もうほぼ自分でどうするか決断できてるってことよ。まあ、私ならいくら型が合うからって、おじさんの魂とくっつけられるって言われたらお断りだけどね」
　先生はお茶を静かにすすった。
「おっさんの魂ではないと思いますけど…」
　私は小さく突っ込んだが先生には華麗にスルーされた。
　確かに、何か的確なアドバイスや答えを求めているかといえばそうではない。共感を得たいがための相談といえた。
「どんと構えとけばいいのよ。大丈夫よ、琴音ちゃんなら」
　締めはお馴染みのこのセリフ。
　一見他人事のように聞こえるが、先生の「大丈夫」は言葉の重みが違う。今までそう言われてきたことはほとんど無事に乗り越えてきた。今回も多分おそらく何とかはなるだろう。
「あ、そうだ。良いこと教えてあげるわ」
　閃いた先生はささっと箏の前の椅子に座った。
「良いこと？」
「簡単な箏技。ほら、座って」
「箏技……」
　なぜ、今こてぃすとの箏技？と躊躇したが、有無言う暇もなく促されるまま立ち上がり、椅子に腰かけると演奏時の構える姿勢になった。
「肘を前に出して腕を伸ばす」
「腕をもう少し体の内側に寄せる。肘は前に出したままで。そして手首を右に払って戻す。その時、人差し指、中指を曲げるの」
「散らし爪するみたいですね」
　中指の爪の右側の面を絃にあて、右から左へ払うようにするとシュッという摩擦音が出る。
　この奏法を散らし爪という。
「そんな感じ。ポイントは第二関節に力を入れること」
「シンプルな技ですね」
「うん、払った時に起きる風が相手に不快感を与えるみたい。鬱陶しいヤツを追っ払いたい時に、さ

り気なく撤退させるには持って来いよ」
「なるほど」
　私は手首を左右に振って練習した。「日常生活で使えるこてぃすと小技」とでも名付けられそうだった。
「あんまり強くすると引っ掻いちゃうこともあるから気を付けてね」
「はーい。こてぃすと技使う機会あるかわからないですけど。爪技はともかく、演奏してる間って無防備やからちょっと怖いんですよね」
「防壁を作ったらいいのよ」
「そんな簡単にできるんですか？」
「絃の左側を左人差し指で手前から巾まで持ってきて、また巾から一に向かって親指で下がる。これを繰り返すの」
　普段は弾かない側の絃を左手でかき鳴らした。不協和音が響いた。
「右手も同じように中指で引っ張ってきて、親指で下りる。両手で左右交互に動かすの」
　私も先生の見本に習い手を動かした。
「それじゃあ左右同じになっちゃう。ちょっとズラさないと。高い音に向かって大きく盛り上げて。で、もっと速く」
　先生はぐわわーっと両手を前後に大きく動かした。ガラララリン～！と部屋中に奇妙な音がこだました。
「これで防壁ができるよ。試しにそのペン投げてごらん」
先生は私の譜面台に置いてあった赤ペンを指した。
「じゃあ……」
　私はペンを手に取りひょいと先生の箏に向かって投げた。
　パシンと跳ね返された。
「わっ！すごい！」
「ね。短時間でなるべくたくさんの音を鳴らすのがコツかな」
「そんな場面滅多に出くわさんと思いますけど」
「人生いつどこで何が起きるかわからないわよ。ちょっとだけでも知ってると、いざっていう時に意外と役立つこともあるからね」
　脅かすような助言に私は苦笑した。
「一発で成功すれば良いですけどね……ありがとうございました」
　お礼をした私は爪を外してケースに片付けた。

　混雑する改札口を通り抜けると私はすぐ目の前の広場へ向かった。
　「憩いのコーナー」と浮き出し文字で壁に書かれた下には鈍色のつるつる素材の椅子が五脚並んでおり、左端におじいさんとおばあさんが座って談笑していた。椅子の斜め前には同素材の丸いテーブルと椅子が三席。

私はきょろきょろと行き交う人々を見渡しながらテーブル椅子に腰かけた。
（ちょっと早かったかな）
カバンからスマホを取り出しボタンを押した。午後三時四十五分と表示された。
ぽやっとしていると後ろから
「お待たせ！」
ポンと軽く肩を叩かれた。
「わっ、どうも。こんにちは」
不意打ちを食らったかのようにあまりの気配のなさに仰天した。
メルフィーユは昨日と変わらず涼やかな表情だった。彼は向かいの席に座ると真剣な顔つきになった。
「夢逢石について新たに分かったことを話すね。まず、夢逢石は使うごとに微量ながらも魔力が放出されているらしい。その魔力の元はクロツブムシという魔界に生息する虫。地上界に棲むアリに似ているかな。このクロツブムシは使いの生気を吸い取る性質があるんだ」
「使いは魔力に対抗できるんじゃないんですか？」
「厳密には魔力というより毒素といったほうがが正確かな。クロツブムシの呼吸には有害物質が含まれていて、使いの魂のみ反応してしまうらしい。『幻の石』と言われているのはそれが原因だろう。魔界の物を使って石作りなんて公にできないからね。だからこそ千冨玲様も内密に生成し、滅多なことでは使いに石を渡すことはなかったんだろう。絶対に必要とする者でなければ」
「それくらい龍月のことどうにかしてあげたかったんやろうなあ」
「そんな純粋な気持ちだけならいいけど」
「え？」
含みのある言い方に私は疑問を抱いた。
どういうこと……？と尋ねようとして私は目を見張った。前方の改札口付近に見覚えのある二人の顔が視界に入ったからだ。
「日向さんや」
指をさした方向にメルフィーユもくるっと振り返った。
今日はスーツ姿ではなく、濃茶色のズボンに白シャツ銀鼠色のパーカーというカジュアルな服装だった。私達二人の視線に気づいた日向は柔和な笑みを返した。
隣にいた芽乃は出会った時と装いは変わらなかったが、髪留めシュシュの柄だけヒョウ柄に変わっていた。彼女も明るい顔になったかと思いきや、見てはいけないものでも発見したかのような衝撃的な表情になり、足早にこちらへ近付いてきた。
「こんにちは……え？」
芽乃はメルフィーユの真ん前に立つと、まじまじと見つめた。
彼は困惑した面持ちで立ち尽くしていたが、芽乃が、
「すごいすべ肌ですね……はあ～ほほう～ふぁ～」
うっとりとした表情になると

「え、何？」
　一気に不審感を募らせたようだった。
「あ、す、すみません。つい見とれてしまって！あたし、お肌が綺麗な人には目がなくて」
　彼女はぺろっと舌を出し、照れくさそうに頭を掻いた。
「あの、ちょっとだけ触らせてもらってもいいですか？」
「……いいけど」
「本当ですか！？ありがとうございます。ではお言葉に甘えて」
　芽乃は右人差し指中指の二本で彼の右頬にそっと触れると、そのまま左右にさすった。
「ふぁお～！これはつるすべ肌度星五つです！」
「つるすべ肌度？」
　テンションマックスで高揚する彼女にメルフィーユはドン引きだった。
「これまでにお肌を触らせてもらった人のつるすべ度を星でチェックしてるんです。あなたは満点です！素晴らしいです！あたしまで嬉しくなりました。ありがとうございました」
「ああ、はい、どうも……」
　彼の笑顔は引きつっていた。悪気がないとはわかっていても、他人に肌を触れられるのは気分が良いものではないだろう。
　芽乃の言うように彼も美肌の持ち主だが、お肌ざらざらごわごわという使いの方が少ないのではないか。ハイレベルな「つるすべ肌コンテスト」なるものが密かに開催されているのだろうか。どちらにせよ私自身には縁のない話だった。
　一昨日家に来て仁達を見て目を輝かせていたのも、つるすべ肌チェックの一環だったのだろう。
　こんなやり取りを日向は離れた所でじっと眺めていた。真っ先に来るかと思ったのに、芽乃の邪魔をしないためだろうか。
　芽乃の興奮がおさまると、日向も私達の所へ歩いて来た。
「こんにちは」
　挨拶をした日向は私からメルフィーユに視線を移した。
　十年ぶりの再会、火花を散らす二人！という展開を予想していたのに、当の本人は別段表情を変えることもなくきょとんとしている一方で、メルフィーユは彼に訝し気な眼差しを向けていた。
　微妙な空気の中、芽乃が日向の上着の裾をちょんちょんと引っ張った。
「何？」
「この人……」
「え？」
「うん、そう」
「まさか？」
　こそこそ話を終えると、日向は目を伏せて浅く頷いた。
「先輩お久しぶりです。その節は大変お世話になりまして」
　先程とは打って変わって自信有り気な笑みを浮かべた。

「龍月と結婚とはどういうことだ？」
　メルフィーユは静かな声で尋ねた。
「どういうことってそのままの意味ですよ」
「彼女の存在を知っていてのことなのか？」
　彼は横目で私を見やった。
　日向は、
「琴音さんにはもう許可をもらっています。夢逢石で実際に龍月とも会ってるし。何も問題ないでしょう？」
　と笑顔を崩さなかった。
「問題ないだと？人を騙すとは使いらしからぬ行為だ」
「騙してなんかないですよ。魂の型が同じであれば龍月でなくてもいい。主体が琴音さんであるのには変わりないんです。たとえ何かしら危険性あったとしても、それが龍月でなければいいことでしょう？」
「なんてことを！」
　彼は声を荒げて日向を睨んだ。けれども日向は冷ややかに笑んた。
「龍月を捨てたあなたにとやかく言われる筋合いはないと思いますけど」
「捨ててなどいない」
「同然のことです。琴音さんの中に魂が生き続けているからといって彼女の存在は無視ですか？失礼ですけど先輩のこと調べさせてもらいました。他の使い達に比べて容姿も全然違うし、高度な術も使える……なぜだろうってあの頃から少し気になってたんでね。そしたら出身は魔穴（まけつ）とか。それなら多少の魔力を使うことも可能ですよね。認められたかったのはわかりますけど、結構まずい事件も起こしてますよね。いつの間にか子供まで作っちゃって。しかも魔界のフレリとの子なんて、そりゃ周囲に知られたらまずい」
　日向はくつくつと笑った。水曜日の誠実な印象とは考えられないくらいの豹変ぶりだった。
　彼が口にした「魔穴」というのは、その昔、天界と魔界で争いがあった時、魔界の者が天界に掘った穴のことを指す。
　黒い渦を巻き、近付いた者の力を吸い取る。現在では跡形もないようだが、魔穴があった場所で生まれた使いは天界では偏見の目を持たれ、疎外されることが多かったらしい。
「勝手に出て行ったのは悪いなとは反省してますけど、自分の成長のために最善の方法を取ったまで。あれから先輩のことは忘れるようにしてたんですよ。それが十年前、偶然龍月に出会ってあなたの名を聞き思い出してしまったんです。彼女を助けたい気持ちの他に先輩への怒りが沸き起こって来て、このやり切れない思いをどうにかしないとって……だって、エコリ様の元を離れたのは先輩のせいなんですからね」
（それはあんたが悪いんやろ）
　私は心の中で思いつつ、二人の会話に割り込んではいけないとぐっと堪えた。
「そんなくだらない理由で龍月や琴音を巻き込んだのか？」

「くだらないですか……彼女にとったら俺は救世主なんじゃないですか」
「型が一致する魂を見つけたことか」
「千冨玲様にお力添え頂きました。あの方のお力なら信じられるでしょう」
「型が一致するからといって、相性が良いとは限らない」
「そうでしょうか？選べる魂がなかったとしたらそこに入るしかないですよね」
「賭けのようなことを……そもそも何故そこまでこだわる？一体何が目的だ？」
　彼は日向に厳しい口調で問うた。日向はせせら笑いをした。
「だから、龍月と結婚することだって言ってるじゃないですか。彼女を無事に助けることが出来れば、父親が先輩だってことすぐにバレますよ。そうすれば規律厳しい天界のこと、居づらくなりますよね」
（なんつーあくどいことを……一昨日のしみじみ感を返せ！）
　鼻持ちならぬ日向の態度に私はだんだん苛々してきた。
　自宅に説明をしに来た時の、誠実で紳士的な対応は全て演技だったのか。容易に信用してしまった私が愚かだった。
　父であるメルフィーユは更に腹立たしいだろう。その証拠に彼は拳を握り、こみ上げる怒りを必死に抑えるように日向と対峙していた。
「俺なら彼女を幸せにしてやることができるんです。龍月もそう願ってたでしょう、ねえ琴音さん？」
「え、あ、その……」
　突然尋ねられて私は口ごもった。
　例え龍月が彼を好きだということが真実だとしても、この状況で日向に協力するのは、龍月やメルフィーユの気持ちを踏みにじってしまうと賛成できない自分がいた。
　私は日向と目を合わせはっきりと告げた。
「龍月は大切です。けど、日向さんの自己都合にも聞こえます」
「それは俺が龍月を騙していると言いたいんですか？」
「騙してるっていうか……」
　たじろいだが後に退くわけにはいかない。
「龍月をダシにしてメフィさんを見返そうとしてるのは本当のことでしょう。過去にどういうやり取りがあったかは知りませんけど、好きじゃないなら関係ない人にまで被害を与えるようなことはしないでほしいです」
「好きじゃない……？」
　日向は低い声で呟いた。
「好きでもない相手なら魂分離の手助けなどしません。先輩の件は偶然が重なっただけ。心から彼女を想っているんです」
　その刹那、彼のまわりを覆う邪悪なオーラを感じた。私は反射的にメルフィーユの方に向いた。
「クロツブムシの魔力が急激に強まっている……このままだと暴走しかねない」
「どうすれば！？」
　高まる危機感に私は動けないままでいると、日向が一歩前に出てすっと右手を目の前に出した。

　その手が私の顔あたりに触れようとした瞬間、私は目を瞑り、思わず右腕を前に指を曲げて掻き払った。
　ビュワッと風が吹き、生温かい感触を覚えた。パッと目を開けてみると、日向が左頬に手を当てていた。頬の一部が切れて血がにじんでいた。
「あ、すみません！咄嗟に手が……！」
　私はあたふたして故意ではないことをアピールしようとした。
　そう、これは完全なる事故。ほんのついさっきたまたま先生が教えてくれた小技の名残であって、鬱陶しい相手を退散させようなんてつゆ思いもせず…いや、多少は煩わしい感もあった。
　いつ何時何が起こるかわからないという先生の予言がピタリと当たってしまった。
　もしコツを掴めていたならば怪我をさせることはなかったのだろうか。如何せん最悪のタイミングで技を出してしまった私は弁解を必死に考えていた。
　けれども、日向は落ち着いた表情で血を拭うとほくそ笑んだ。
「そういえば、こてぃすとだったんでしたっけ。すっかり油断してました。弾く者の心を表わすそうですからね。あなたも俺が邪魔だってことですね」
「違います！だから、今のはわざとじゃなくて『うっかり』です！さっきまでお稽古やったので……普段は爪なんて持参してないし！」
　爪技は爪を持っていないと発動しない。
　私は冷や汗だらだらだった。よほど焦っていたのが見て取れたのか、メルフィーユが静かに口を開いた。
「琴音、落ち着いて」
「で、でも大切な顔に傷が！」
「治癒能力ですぐに治せるから」
　その言葉を聞いてほっとしたのも束の間だった。
「安心して下さい。約束の日までは手出しはしません」
「約束の日って明後日やん！」
「それまでに彼女に聞いてみるといいでしょう。ちょうど最後ですし」
「最後？」
「知りませんでしたか？夢逢石を介して結合している魂と会えるのは一個につき三度までと決まっています」
「えっ！？」
私は思わず声を上げた。
「俺の手元にはいくつか残ってますけど」
　日向はズボンのポケットの中から石を取り出した。開けた右手には少なくとも五個の夢逢石が乗っていた。
「自ら毒薬を飲んでいるのと同じことだぞ」
「心配してくれてるんですか。ありがとうございます。でも、もう決めたことなので。必ずやり遂げ

てみせます。邪魔はさせませんよ……っていくら優秀な先輩でもできないと思いますけど」
　彼は完全にメルフィーユを見下す態度だった。
　それが先輩に対する口のきき方か！と彼の代わりにブチ切れそうなくらい怒り心頭に達していたが、挑発に乗っては相手の思うツボ、こんな人通りの多い所で一般人を巻き込むような危機が訪れれば収拾がつかない。
「分かりました。今晩龍月に聞いてみます。彼女の本当の気持ちを」
　きっぱりと言い放った私にメルフィーユは何か言いたげだったが、口には出さず目を逸らした。
「ではまた明後日に」
　身を翻した日向は元来た道向かって歩き出した。おろおろしていた芽乃も会釈すると彼の後を追った。
　彼らの姿が見えなくなると私はようやく体の力が抜けた。
「何やろう、このイライラ感とやるせない感」
「あの時どう思われてもきつく叱っておけばよかった……龍月にまで危害が及ぶようなことになるなんて……彼女が本当に日向を慕っているのなら、とやかく言える立場じゃないよ」
　メルフィーユは今は悲しみに暮れているようだった。
　日向の暴言にも声を荒げて反論しなかったのは自責の念にかられているのと、娘の気持ちを汲んでのことだろうか。正面からぶつかれば勝てる相手ではないとふんでいるにしても、彼のやり方はあまりにも幼稚で卑怯である。
「何とかなるよう龍月と話して考えてみるので気を落とさないで下さい」
　すっかり気弱になってしまった彼を見て励まさずにはいられなかった。
「うん……ありがとう。明日は仕事？」
「夕方には終わります。午後七時にここでどうでしょうか？」
　私は余裕を持った待ち合わせ時間を提案した。
「分かった。お願いするよ」
　彼は力なく微笑んだ。

　三度目ともなると夢で逢うのもすっかり慣れてきた私。
　湿っぽい空気の中で、時折生暖かい風が吹いているような奇妙な心地だった。ぼんやりと龍月のいる部屋が映ると、私はテーブルで何やら書き物をしている彼女にすぐさま目が留まった。
　彼女は私の視線に気が付くとパッと手を止めた。
「何かあった？」
　愁いを秘めた瞳だった。
　私は今日の出来事を正直に話そうと決めた。
「日向さん、夢逢石の魔力でおかしくなりかけてたよ。そんな状態で分離って大丈夫なん？」
「やっぱり彼には扱いきれない代物だったんだね」
「石のこと知ってたん？っていうか龍月は影響ないの？」

「わたしは使いと魔物の子だから。多少の魔力ならどうもないみたい。お父さんのことも分かってたんだ。日向に話したらすぐに顔色変えてたもん。きっと何か企むだろうなって。身を粉にする必要なんかないのに。自分も死ぬかもしれないって言うのにね」

彼女はうっすらと笑みを浮かべた。私は身震いした。

「どうしたん？龍月ヘンやで」

「変？これがありのままだよ」

「龍月は日向さんのこと好きなんやろう？彼はそう言ってた」

「好きなのは好きだよ。でもわたしはやっぱりここで静かに暮らしたい。はじめは体を得られればできることも増えるだろうなと思ってつい口に出してしまった。けど、よくよく考えたら、この生まれのせいで天界で暮らせなかったんだから、今更神様や使いと上手くやれるはずがないなって気付いたんだ。余計な気を遣いながら身を潜めて生きるくらいならこのままの方が良い。ここはちゃんとわたしの居場所になってるんだよ」

彼女は凛然と天井を見上げた。

「結婚の話が出た数日後、日向にも同じことを話したよ。なのに彼は張り切って準備を進めてた。十年間もかけさせてしまったのは申し訳ないけど、お父さんを見返すための目的もあるって考えたら、そういうやり方は気に入らないなって」

彼女はぎゅっと目を瞑った。

「じゃあ、昨日は分離拒否してくれれば良かったのに」

「拒否しても彼は強行手段で分離させるつもりだよ。あなたに意思を尋ねたのは演出。決行日に向けて盛り上げるためのね。苦労しながらも当日はようやく大成功をおさめ称賛されるっていうシナリオが既に出来上がってる。認めてもらいたかったんだよ。自分が尊敬してた人に」

「もっとこう、平和的に済ます方法があったやろに」

「当初はそうだったかもしれないね」

「お父さんのこと知ってしもたのが原因？」

「彼にとってはそれが起爆剤になったんだろう。表面上は何も変わりは見えなかったけど、じわじわと彼の心が負の感情に蝕まれていったのかもしれない」

使いであってもそんなことに……と思った。

クロツブムシ入りの夢逢石という危険な物体に日向の執念が入り混ざり、このような事態に陥ったのだろうか。

「でもね、この世はさまざまな要因が重なり合って出来ているもの。根本的な問題を突き詰めていくときりがないよ。過去を悔いても意味のないこと。それよりも現実を見て前に進まないと」

優しく微笑む彼女に私はうん、と大きく頷いた。

「まあ、一番の原因は、日向が自分大好きな自惚れ野郎ということだと思ってるけど」

その台詞に私は思わず噴き出した。

「そうかもな。元の彼に戻すにはどうすれば良いんやろ……」

「こんな時こそ、こてぃすとの力の出番だよ」

「こてぃすとって、弾くの？」
「聴いた者の心を鎮める効果があるなら、試してみる価値はあると思う」
「弾くのはいいんやけども……」
　私はしばし躊躇した。
　真っ先に思い浮かんだ曲が『背ワタ』だったからだ。絶対選曲悪いよなと思いながらも、今最も弾き込んでいるといったらこの曲の他なかった。
「仮に弾くとしても、日向さんが聴いてくれる場はどうやって設けようか。今日の『うっかり』で敵対心持ってるって誤解が鮮明に記憶に残ったやろうし、『ちょっと聴いて下さい』じゃ引っかからんやろうし……」
　う一んと頭をひねり考え込んだ私に龍月は言った。
「仲介してくれる人でもいれば良いんだけど…」
「このごたごた感を知っててまとめてくれそうな人か」
　私の頭にある人物がぽっと思い浮かんだ。
「芽乃さんは？日向のお姉さん。天界で美容関連の仕事をしてるとか」
「実際に会ったことはないけど」
「つるすべ肌研究に命かけてそうな人やけど、話したらわかってくれるかも……と願ってる」
　曖昧な表現に龍月は苦笑した。
「明日会えそうなの？」
「会社の最寄り駅の近くに滞在しているお店があるらしいからそこに行ってみる。あとは夢逢石をどうするか…」
「今の状態ならまだ石がないと彼も何もできない。持っている石全て取り上げる方法もあるけど」
「飛んで火に入る夏の虫やな」
「ごめんね、巻き込んでしまって」
「いや、巻き込まれたのは龍月のほうやん。困ったときはお互い様さ。それにたまには非日常の体験もしておかんと、こてぃすとの腕も落ちてしまうし」
　この四年間で既に腕は落ちているというか、非日常的に役立つこてぃすと技など頭からすっかり抜け落ちているに等しい。
　ウダウダ文句言っている暇はない。自分のことは自分で決着をつける。多少は他人の協力も得て。
「ありがとう。これで会えるの最後なんでしょう？」
「三回目やもんな。いつか技術が発達したら危険な石使わんでも魂と交流できる方法が見つかるかもしれへんよ。その頃にはもしかしたら死んでるかもしれやんけど……って、うちが死んだら龍月ってどうなるん？」
「日向の話によると浮遊魂として彷徨い、また新たな主と出会うまで待つとか。生前の記憶が失くなってしまうらしいけど」
「全部忘れてしまうってこと？」
「全部か一部かは分からないけど、次の魂と結合する時に障害になるからかな。本当のところは実際

の場面にならないと……まだまだ先のことだから今は心配する必要ないよ」
　優しい表情になった彼女に私はほっとした。
「そろそろ起きる時間かな……」
「もうそんな時間か」
「また会えるよ、わたし達」
「またって……？」
　彼女の問いの答えを聞く間もなく、すうっと視界が霞んでしまった。
　パチっと瞼が開いた。きっかり午前五時。
　日の出前だが、マンション前の幾つもの外灯の光がカーテンの隙間から漏れ、電気をつけなくても手元が分かる位は明るかった。私は体を起こした。この時間はまだ冷んやりした空気に包まれている。
　隣で寝ている仁達はすうすうと寝息を立てていた。
　昨日は「残業で遅くなる」とメールがあってから午後十一時を過ぎても帰宅しなかったので、何時に帰ってきたのは定かではない。相当疲れが溜まっているにちがいない。
　私はベッドの宮棚の石に視線を向けると石は真っ二つに割れていた。
　もう使えないのか――と落胆して眺めていると、割れ目から黒い何かが蠢いていた。
「うわあぁぁぁ～！」
　割れた石からは小さな黒い生物がぞろぞろと這い出し、ベッドを伝い巾木に沿って行進していた。
　彼奴らが魔力を放つクロツブムシだろう。チラリと仁達を見たが、変わらず気持ちよさそうに眠っていた。傍で叫んだにも関わらず、どんだけ熟睡してんねん！とずっこけそうになった。
　しかし、叩き起こすのも可哀想なので、効くかはわからなかったが、とりあえず殺虫剤を取りにキッチンまで猛ダッシュした。
　そして、スプレー殺虫剤を手に取ると再び寝室まで戻り、悍ましい群れに一吹きしようと構えた時、目の前の光景に唖然とした。
　床の隅を這っているクロツブムシ達を、ゼンマイが長い舌で舐め取っていたのだった。
「ふぬふぬぬ～」
　ドア前に立って待ち構えるゼンマイ。
　舌を出してぺろっと飲み込み、もぐもぐごっくん。また、舌を出しぺろっと――を繰り返し、一匹も逃さず駆除していた。出て来た全てのムシを食べたゼンマイは「げふぅ～」と小さくゲップをした。
　硬直が解けた私は彼の隣にしゃがみこんだ。
「ゼンマイ、虫食べられたん？」
「ふぬ！」
　ゼンマイはキリっとした表情で鳴いた。
「ふぬぬぬーぬ、ぬぬぬ」
「うんうん、全然わからん。ワラビ！通訳お願～い！」
　私は和室にいるワラビを呼んだ。
　十秒程してからのっそり姿を現したワラビ。秒単位で来たということはご機嫌斜めではない表れだ

った。
「ごめん、もう一回言ってくれへんかな」
「ふぬぬぬ一ぬ、ぬぬぬ」
　ワラビはこう訳してくれた。
「私達の種族は地上に現れる魔虫を食べて追い払っている、だそうだ」
「まむし？」
「魔界に棲む虫のことだ」
「ああ、それで魔虫か。たいしたもんや。ありがとう！」
「ぬふふふふ～！」
　ゼンマイの頭を撫でると目を細めた。笑い顔は少しキモくなる生き物である。
「何かあったん～？」
　ベッドから下りてきた仁達は眠たそうに目をゴシゴシこすっていた。
「夢逢石が割れて虫が出てきたん」
「えっ？虫！？どこ！？」
　彼は一瞬にして目覚めた。
「ゼンマイが全部食べてくれたからおらんよ」
「そうか、食べてくれたんか……ならよかった」
「あれ？そこは驚かんのや」
「そういう生き物なんかなって」
「うん、当たってる。そういう生き物やな」
　三年も一緒に暮らしていると、精霊についても身近な存在になってしまうようだった。
「ゼンマイがいれば虫が出ても平気やね」
　仁達は嬉しそうな顔をしたが私は
「食べるのは、魔虫、魔界の虫だけやで」
　ぴしゃりと言い放った。
「ええ～？残念や」
「普通の害虫はうちが駆除するから」
「うん、ありがとう。琴音ちゃんは怖くないんやね、虫」
「怖いけど、放置しとく方が嫌やし」
「すごいなあ」
「どこの家庭でもそんなもんちゃう？」
　私のドライな返答に仁達は思案顔になった。
　梅雨時の一般家庭では悩まされがちな、地を這い稀に跳びかかる黒い悪魔が出没しても捕獲せず自然退却を待つタイプだけある。
「そうなんかなあ。ゼンマイが魔界の悪い虫を食べてくれるなら安心やね」
「せやなあ……あ！」

「どうしたん？」
「ええこと思いついた！」
　私は勢いよく立ち上がった。
「日向さんの持ってる夢逢石の魔虫、ゼンマイに食べてもろたらええやん」
「なるほど！でも、割れないと出て来ないんだよね？」
「そこは……金槌で叩いてみるとか？」
「割れるかなあ」
「どうやろ」
　私と仁達はうーんと首を傾げた。
　するとゼンマイがトトトトとベッドに向かって走り出し、マットレスにぴょんと飛び乗ると、宮棚にある割れた石の破片を両手に抱えて持ち帰ってきた。
　それを私たちの前の床にポンと置くと、「ふぬっ！」という気合いのこもった声で両手を高く上げたかと思うと、みるみるうちに真ん中三本の爪が伸び始めた。
　そうして二十センチはあろうかという長さまで到達すると、今度はウイイイイーンと回転し始めた。
「えっ！？」
　私と仁達は二人同時に声を上げた。
　ゼンマイは私達の反応を気に止めることなく、回転した爪を床の石に突き立てた。
　ギュイーン！ドドドドド……！パリン！
　ものの三秒で石は粉々に砕かれてしまった。
「ふぬぬぬっ！ふぬーぬぬぬ！」
　ゼンマイは得意げに何かを訴えていた。
「石の破壊にお役に立ちます！ってことかな」
　傍らにいるワラビには特に否定されなかった。
　奇妙な光景に躊躇いながらも、夢逢石の破壊はゼンマイドリル、クロツブムシの駆除はゼンマイ舐め取りで解決できそうだと、解決の兆しが見え始めた。
　後は仁達に一生に一度では済まないだろうお願いをするのみ。
「お願いがあるん」
「うん？」
「今日仕事終わったらマロ駅まで来てほしいんやけど。芽乃さんがいるお店に行こうと思って」
「なんで？」
「龍月と話してて、日向さんを説得するのには第三者の協力が要るなってことになって。それで、事情を知ってる芽乃さんに頼んでみるのが良いかなと」
「それは良いけど、ぼくがついていく必要あるの？」
　彼は露骨に嫌そうな顔をした。
　私はなるべく刺々しい口調にならぬよう気をつけた。
「タダで頼むより頼まれてくれそうかなって。仁達は綺麗なお肌してるから、行ってあげたら彼女も

喜ぶんちゃうかなと……」
「つまりオトリになってほしいってことやね」
「まあ、そういうことかな……イヤ？」
「緊張するけど、琴音ちゃんのためやからね。ついて行くよ」
「やたっ！ありがとう！」
　両手を上げて喜ぶ私に対し、仁達は心なしかげんなりしていた。
「さ、朝ご飯食べよ！」
　私は早朝から元気一杯、張り切って朝食の支度を始めた。

　基本、土日祝は会社は休みだが、第一週目と最終週は何かと忙しいため出勤する人が多い。
　私は朝から倉庫で昨日工場から届いた商品サンプルの確認を行っていた。
　大きな段ボールを開けて中身を取り出していると、
「お疲れ様～」
　という声がかかった。後ろを振り返るとななしろまさんが手を振って来た。
「お疲れ様です」
「サンプル撮影に使うの？」
「はい、前シーズンのカタログに載ってた商品ですよね。流行りの北欧柄」
「よく知ってるね」
　この会社では、ホームセンター、バラエティショップ等で卸売の他にも、大手通販会社で独自企画の商品を販売しており、カタログ掲載終了後に、余剰在庫を自社ネットショップで売りさばく形もとっている。
「写真や商品説明の参考に見てるんです。説明は少ないので売り文句は自分で考えてますけど。これがなかなか難しくて良い表現が浮かんでこないんですよ」
「そうなの？頻繁にホームページ見てるけど、毎回すぐに完売してるから文才あると思うよ」
「いや、それは、値段が安くなってるし、何より商品力があるからですよ。売れ残ってる商品はずっと残ってるので」
「まあ、中には企画モノの商品や使用用途が限定されすぎたのもあるからね。仕方ないよ」
　そういうものなのかなあ～自分の力不足ではないのかと思っていると、彼が手にしているものに気を留めた。
「それは新商品ですか？」
「ああ、これはカモフラージュ風呂敷。箱に入らないサイズの物、例えば姿見、プリンタ、収納ラックとかの目隠しが自然にできる布なんだ。硬すぎず柔らかすぎず、皺のつきにくい素材」
　手渡された三枚の風呂敷は全て柄が異なっていた。触ると表面はつるつるしていた。
「大中小の三種類あって……広げていいよ」
　一番小さい風呂敷を広げると、一面迷彩柄だった。
　薄い緑色とベージュが混ざり木々の色に調和しそうだった。大きいのは柄は同じで、濃いブラウン

を基調としたカラーで、中サイズは大きな葉っぱが描かれたリーフ柄とどれもインテリアに馴染みそうな色合いと柄だった。
「ななしろまさんがデザインしたんですか？」
「うん」
「派手な柄やのに柔らかい色遣いのおかげか自然な感じですね。ハイキングとかにも持って行けそう」
「屋外でも使用できるよう耐水性もあるんだ。だから多少の雨で濡れても平気。専用ケースも付いててコンパクトに折りたためるよ。ウェブでも販売したら売れるかもね」
「良いんですか？」
「間宮さんに了承を得ないと分からないけど……」
　と話し出したところに、前方から本人の姿が見えた。
　今日は黒のプリーツスカートに白いハイネックのニットというシンプルかつ上品な装いだった。
「あ、ちょうどいいところに……間宮さん！」
「何～？」
「カモフラ風呂敷、ウェブでも売っていいですかね？」
「うーん、価格変更せんだらええで」
「ありがとうございます」
「バンバン売ったって」
「そこまで売れるかは……」
「あはははは！まあ、在庫は各サイズ二十個くらいにしといたら？」
　間宮さんは豪快に笑い飛ばした。
「はい。撮影のためサンプルをお借りしたいんですけど」
「じゃあ、それ持ってっていいよ。スペックは後でメール送るから」
「ありがとうございます。参考写真もありますか？」
「あるにはあるんだけど、解像度が良くないからイメージも撮り直したほうが良いかも」
　ななしろまさんが迷っていると間宮さんが、
「家にある物にかけてみたらええよ。スタジオにあるんはいかにもセットされた物って感じするし。使い勝手分かると説明も書きやすいやろ」
　快く提案してくれた。
「はい、試しに撮ってみて、良さそうなら商品説明画像に使います。サンプル返すのは週明けになっても良いでしょうか？」
「全然構わんで」
「では、しばらくお借りします」
　お礼を述べると間宮さんは、
「あ、早よ行かなあかんかった。じゃあね！」
　と倉庫奥へと慌てて走って行った。
「良かったね」

ななしろまさんも安心したようだった。
「良い写真撮れるかなあ……」
私は被せるのに最適な物を考え始めた。
自宅には姿見や背の高い引き出しが置いてある。箏はどうだろうか。大サイズの風呂敷ならちょうど良くおさまるかもしれない。
自分で購入した箏の油単は、箏購入時にサービスで付けてもらった付属品の一つで、単体で購入したら一万円近くはする高級品だった。専用のカバーがあるのに敢えて迷彩柄を被せる必要はない。
けれども中には油単を持ってない人もいるわけで、高価な物は買いたくないけど、きちんと埃避けになるカバーが欲しいという人にはぴったりなのではないかと推測した。
安くておしゃれな箏カバー。ターゲットが限定されすぎやしないか。箏曲界の将来を背負って立つ若い世代にとっては意外と必要とされるかもしれない。
箏のみならず、持ち運び可能な楽器全般に当てはまりそうなので、商品説明には「野外コンサートでの楽器カバーにも最適」とでもこっそり書いておこうと計画した。

午後五時半ぴったりに仕事を終え、会社を出た私は早歩きでモソシ駅に向かった。
イロモノ枠自販機の横を通り過ぎる時ちらっとラインナップを見ると、あの「なめらかきなこもち味ジュース」の替わりに、ぜんざいらしき飲み物のサンプルが陳列されていた。きっと、めでたく在庫が完売したのだと私は飲んだことを悔やまずに足を進めた。
約十分後、カフェ・キュイモスの前に到着すると、ビルの入口で仁達がスマホを片手に待っているのが目に入った。私は彼のところまで移動した。
「お待たせ〜行こか」
彼を先頭に階段を上がっていった。
お店のガラス扉には、「美容サロン〜ィヤシマッセ〜」と書かれていた。
扉を引くとピロロロンと可愛らしい音のチャイムが鳴った。
「いらっしゃいませ〜あらっ！」
受付カウンター付近で他の女性スタッフと話していた芽乃は、私と仁達が来店したことに気付くと笑顔になり脇目も振らず走って来た。
黒スーツできちんと感が出ていると思いきや、髪型はいつものツインテールだった。
「こんにちは」
「こんなにすぐに来てもらえるなんて嬉しいわ。初めてのお客様にはスキンチェックときゅうりパックを無料サービスでしてるんだけど体験してく？」
芽乃は砕け口調だった。
私は無料という言葉に釣られそうになったが、本来の目的を思い起した。
「あの、今日は少し聞きたいことがあって…」
「そうだったんだ。なんでも聞いて！さ、こちらへどうぞ」
芽乃は店奥のテーブル席まで案内してくれた。白くて滑らかな触り心地のテーブル席に着いた私と

仁達は、そわそわしながらも早速本題に入った。
「龍月の結婚の件なんですけども、昨日彼女と話していたら、はじめは体を得たかったけれど、今の状態が良いと言われたんです。日向さんにも話したけど、分離計画を勧められてしまったようで」
「そうなんだ」
　芽乃は表情を曇らせた。
「あたしは弟が幸せになれるならって信用して手伝ってたけど、最近はちょっとヤバいんじゃないかって思い始めてた。人に指図されるのが嫌いなコだから控えめにしか注意してこなかったけど、それも悪かったんだよね」
「芽乃さんのせいじゃありませんよ。龍月は日向さんのことが好きで、今後も付き合っていきたいと考えてるのは本当です。でも、このままやと彼が夢逢石の虫の毒素にやられてしまいます」
「日向が持っている石だけでも取り上げようかとも考えたんだけどね、そうしたところでどう処分するか見当つかなかったし、手にしただけでもクロツブムシの毒には触れる事になるから怖くてできなかった」
「それなんですけど……夢逢石を安全にしかも効率的に破壊できる方法、見つけました」
　私は両手拳をぎゅっと握り締めた。
「えっ？」
「うちのお箏の精霊が魔虫を食べる種で、石も鋭い回転爪で砕けるみたいなんです」
「そんなすごい精霊がいたんだ！」
「うちも初めて今朝その現場を目撃したんですけどね」
　驚いた彼女はきっといかつい生物を想像したに違いない。精霊も見かけによらぬものである。
「じゃあ、石自体は何とかして預かることにするよ。」
「ありがとうございます。あと、もう一つあって。日向さんの精神状態を安定させるために、一曲演奏したいと思ってるんです。こてぃすとの演奏を聴くと心が鎮まると言われているので効果あるんじゃないかって言われました」
「なるほど。じゃあセッティングしないといけないわね」
「そこが問題なんですよね。こてぃすと技だけなら爪があれば使えますけど、演奏自体は楽器本体がないとどうにもならないので」
「マロ駅の改札口出た広場は？こないだ歌ってる人いたし」
　彼女の突拍子もない提案に私はドギマギした。
「えっ？人通り多くないですかね？それなら河原の方がマシかも。マロ駅を南に下っていくと小川が流れてるんです。ハラビオ橋っていう小さな橋があって、河原っていっても雑草伸び放題で景観はイマイチなんです」
「よく弾いてるの？」
「独身時代は住まいの近くに公園や河原が多かったので、たまに箏持ち出して練習しに行ってました。川沿いなら通りかかる人もそんなにおらんから集中できるし、万が一何か起きたとしても被害を最小限に抑えられそうかなと」

「もう慣れっこなんだね。じゃあ待ち合わせをハラビオ橋に変えようか」
　芽乃は感心したかのように笑った。
「日向さん、不審に思われませんかね？」
「不審？」
「その、河原で待ち合わせっていうのがいかにも何か計画してるとバレないですかね」
　私は恐る恐る尋ねた。
「こてぃすとの力、爪技の方は警戒してるだろけど、演奏はそれほどの腕ではないだろうって思いこんでる気がするわ。効くか効かないかの面だけでね」
「いえいえ！全くその通りです。うちもこてぃすと演奏は数年ぶりなので上手くできるかどうか不安だらけです」
「なら、ここは下手に隠すよりも一曲演奏するから聴きに来てってこと言っておいてもいいんじゃない？『あなたの心を浄化します』とか書いた予告状送りつけても良いかも。かっこいいじゃん」
　彼女は笑いをこらえていた。深刻な状況なのに絶対面白がっていた。
「いやいやいや！煽ってどうするんですか。場合によっては演奏するかもしれません、くらいでお願いします」
「もっと自信持っていいと思うけどねえ。弟よりは上手いんだろうし」
「日向さんの演奏ってどうなんですか？」
「上手か下手かの差があたしにはよく分からないけど、弾き方は柔らかいかな。女の人が弾いてる感じっていうのかな」
「羨ましいですね。うちには柔らかさが足りなくて。鯱張りがちなんです。弾く音にも性格が表れるって先生が言ってました」
「まあ、どっちかというと日向は繊細な心の持ち主だし……男のほうが未練がましいって言うからね。あたしはガンガン弾いてるほうが好きだけど。苦手な分野もあれば得意分野もあるわけでしょ？それを強みにしたらいいんじゃないの？」
「そうですね……」
　当を得た彼女の発言に私は、美肌への異常な執着心を除けば気兼ねなく話せる人だと思った。
「でも、箏運ぶの大変そうね」
「大丈夫です。仁達にも運んでもらうので」
　ぱっと横に振り向くと仁達は、
「え、あ、うん」
　と挙動不審になりかけた。
「頼もしいね。協力と引き換えの条件ってわけじゃないけど、あたしからも一つお願いいいかな？」
「何でしょう？」
「仁達さんの美肌の秘訣を知りたくて。一ヶ月の食生活を記録してくれない？使ってる化粧品の種類も大切だけど、それ以上にインナーケアも重要だと思うの。ホントに簡単でいいんで」
　彼女はパンと手を合わせ願いを請うた。

「良いよな？」
　鬼気迫る私の眼力にノーと言えない状況に陥った仁達。もちろん縦に頷かせた。
「ありがとう！」
　心から喜んでいる芽乃を尻目に、仁達は仕方ないかと若干諦めているようだった。
　うちがパパッと書いてやるから！と小声で言い、彼の肩を軽くポンポンと叩いた。
「それにしても人間でこれだけ綺麗なお肌って憧れるわ～」
　一人悦に入る芽乃に私はそれとなく尋ねた。
「芽乃さんっておいくつなんですか？」
「うんと、四十五かな」
「あ……そ、そうでしたか。天界の人は若いですね」
　私は目眩を起こしそうになった。
「若く見えるだけよ。使いはだいたい見た目年齢プラス二十歳～三十歳が実年齢と思って間違いないわ。だからあたしや日向はまだ年相応じゃないかな。龍月のお父さんの方が若いよ」
「確かに……って、あの人はいくつくらいなんでしょう？」
「聞いてないんだ？」
「タイミングを逃したというか、聞いた後の衝撃を想像すると聞けないなと思って」
「そりゃそうなるわね。六十代じゃない？」
「うちのおとんと同年代か……」
　うちのメタボ体型親父も、三十数年前は驚くほどスリムだった。
　実家の父の書斎で父と母の若かりし頃のアルバムに、当時流行したと思われる体にフィットするベルボトムズボンを履きこなし、かっこよくポーズを決めている父の写真を見た時、時の流れは残酷なものだとひしひしと感じ、パタンとアルバムを閉じた記憶がある。
「落ち込むことないわよ。人と使いは似ててもやっぱり違うんだし。割り切って考えたほうが良いわよ」
　力づけようとしてくれる彼女に私は曖昧に頷いた。
　何百歳とか言われたら人間の寿命を超えた未知の領域と思えるが、五十、六十歳は比較対象が存在するためか現実味があって気落ちしかねなかった。
「彼にもまた会ったら色々聞こう……ふふっ」
　芽乃はキラリと瞳の奥を光らせた。
　可哀想に。やっかいな人に目を付けられてしまったものだ。
「まだ時間あるなら、きゅうりパック試していかない？十五分くらいで終わるから」
「今何時？」
　腕時計をしているのに私はわざわざ仁達に尋ねた。
「ちょうど六時だよ」
　待ち合わせの時刻まであと一時間。ここからマロ駅まで約三十分。十分間に合う。
「やってきます」

「え？やるん？」
「タダやし。気持ち良さそうやん」
「はあ……」
　乗る気ではない仁達だったが、芽乃はいそいそとしていた。
「じゃあこっち来て～」
　私達は案内する彼女に付いていった。
　約十五分間、きゅうりを顔じゅうにぴったり貼り付けられた後のお肌は心持ちしっとりしていた。
　メイクルームで化粧を終えると、仁達の待つ受付へ向かった。
「お待たせ。仁達更につややかになったんちゃうん？」
「そうかなあ？あんまり変わらん気がするけど」
「二人とも肌色明るくなったわ！」
　芽乃は満足そうだった。
　私と仁達は顔を見合わせてハハハと空笑いした。
「それじゃ、明日十一時頃にハラビオ橋で」
「はい、準備して待ってます。よろしくお願いします」
　私達は揃ってお辞儀をすると店を後にした。

　午後六時五十五分。待ち合わせ五分前。
　改札を抜けると、マロ駅憩いの広場の椅子の一つに座り読書をしているメルフィーユの横顔が見えた。私は足早に駆け寄った。
「遅くなってすみません！」
「ううん、時間通りだよ。そちらは旦那さん？」
「そうです、夫の仁達です」
「どうも、こんばんは」
　私に紹介された仁達は挨拶をした。
　するとメルフィーユは立ち上がった。
「龍月の父のメルフィーユです」
「凛堂仁達です。いつもお世話になっております」
　まるで取引先の顧客と接するような対応に、メルフィーユも
「いえいえこちらこそ」
　と恐縮していた。
　そして「若いなあ……」と私にだけ聞こえるようポツリと言った仁達。
　事前説明は事細かくしておいたつもりだったが驚きは隠せないようだった。見た目は彼と同世代でも、相手はその二倍近くは生きているのだ。
「昨日はどうだった？」
「龍月は分離には反対やったようです。日向さんことは好きやけど、うちやお父さんに迷惑かけてま

で体を得ることはしたくないと」
「そうか……」
　メルフィーユは沈痛な面持ちだった。
「そこで、クロツブムシの毒素を抜いて元の彼に戻すために、こてぃすとの演奏をしたらどうかと提案されました。直で聴いてもらうのは無理やと思ったので、芽乃さんに協力してもらえないかさっき頼んできたんです。彼女もこのまま弟を放っておくのは危険やと心配されてたみたいで、すんなり話が通りました」
「あの子か……何か苦手なんだよね、ああいうタイプ」
「まあまあ。研究熱心なんですよ」
　外見上は派手好きそうなのに中身は堅実な人だった。
　芽乃とは至極関わりたくなさそうな表情が見て取れたため、昨日芽乃が話していた企みは口にしなかった。
「明日十一時、場所はマロ駅を南下していったところにあるハラビオ橋です」
「分かった。こっちでも対策練ってるところだから、もしかしたら少し遅刻するかもしれない」
「構わないですよ。仁達がいるし」
「そうだね、頼りになる旦那さんがいるもんね」
「えっ？」
　仁達は目を丸くした。
「前はうち一人やったからな。仁達がいてくれると心強いわ」
「ぼくは傍で見守るくらいしかできないよ」
「それで十分や」
　誰かいるのといないとの差は大きい。
　安心感の塊である彼がいれば、テンパる事態に陥ってもきっと落ち着いて対処できる。
「帰って明日の準備せんと」
「気負い過ぎないようにね」
　やや心配そうな顔をしたメルフィーユだったが、私は「大丈夫」と自身にも言い聞かせるようにコクリとした。

　いよいよ分離実行日。いや、私や龍月にとっては分離阻止実行日になるのか。
　私も今日でとうとう三十歳。ほんの一週間前までの予定では、近所で評判の洋菓子店でケーキを二つ買い、仁達と一緒にお祝いした後、更なる大人の階段を上り始めましたとしんみり気分に浸るというプランだったのに、全く予想だにしない展開を迎えてしまった。
　長生き種の天界や魔界の人達なら、二十代と三十代、ましてや一歳の差なんて差がないにも等しいことだろう。
　しかし私は人間だ。街頭アンケートに回答する時だって、つい一日前は二十九歳だったのに、三十代に印を付けないといけなくなる。

あるいは二十五歳〜二十九歳のくくりから三十歳〜三十四歳のくくりに入ることになり、四捨五入すれば三十四歳だって三十歳なのだという話も罷り通ってしまうわけで、微妙な心境を私だけでなく、青春時代後を過ごす世の人々は持ち合わせているはずなのだ。

（見た目だけじゃ一歳の違いなんてわからんのやし、そんなに気落ちすることもないんやろけど）

と前向きに考えて私は箏運搬の準備を進めていた。

髪の毛は邪魔（おばけ）にならないように、真紅のリボン型バナナクリップですっきりと一つにまとめた。

服装は薄手の鶯色のセーターに、下は象牙色のハーフパンツと身軽な格好に。下半身は冷えやすいのでズボンの下にはレギンス、更に膝丈レッグウォーマーを着用し、防寒対策ばっちりだった。

通常の練習時のように椅子に座って箏を弾く方がはるかにラクなのだが、自力で運搬となると、河原まで椅子や立奏台を一度で運ぶのは無理だった。そのため過去の野外練習は、地べたに正座をして弾く座奏スタイルで行っていた。

今回は仁達が手伝ってくれるとはいえ、川まで距離があるのと荷物はコンパクトにしたいという点から、楽器、箏柱箱、爪、チューナー、楽譜の他、座奏時に必要な箏の頭部分を乗せる朱色の琴台（きんだい）、ビニールシート、座布団一枚、カモフラージュ風呂敷大をリュックに詰め込んだ。

パンパンになったリュックのファスナーを閉めて背負おうとすると、黒の薄手コートを着た仁達が、

「ぼくが持つよ」

さっとリュックを取り背負った。

「ありがとう」

私はオリーブ色のキルティングジャケットを羽織った。

そしてフラップ式ショルダーバッグを斜め掛けにすると、壁に立てかけてあったケース入りの箏を壁からそっとはなし、ケース中央の取っ手を右手で持ちそのまま横向きに下ろした。

「さあ行こか」

準備を整えた私達は玄関ドアを開けた。

外は爽やかに晴れ渡っていた。日曜日とあって、大通りを通る車も少なかった。

紅葉真っ盛りの木々が時折風に吹かれてはハラハラと葉を落とす様子は春の散りゆく桜に重なった。

この色鮮やかな季節が過ぎると、もう今年もおしまいなんだなと感慨深くなった。

私は不安定な箏をぶつけないように細心の注意を払ってゆっくり歩いていた。

箏という楽器は運搬時、折り畳めたらどんなに便利だろうかと切に思う。

重さを除けば、身長百八十センチの人を横向きにして右脇に抱えて歩いているのと同じである。その割に重くないので歩く度に上下が左右に揺れ、左手で支えていないと自分の身体にぶつけてよろめいたりとコツを押さえていないと非常に持ちにくい楽器だった。

十分ほど歩くと右手に小川が見えてきた。この場所は隠れた桜の名所と知られており、春には地元の人々で賑わう。秋は秋で桜の紅葉が楽しめる。けれども春に比べると見物客はわずかだった。

今までの紅葉狩りといえばモミジやイチョウがメインで、桜が傍らにあったとしても主役を立てる脇役にすぎなかった。ところが、こうして桜だけの紅葉をじっくり観察していると、そのどっしりとした存在感に圧倒された。

既に大部分が落葉していたが、散り積もった葉は黄色いもの、黄色から赤に染まりかけのもの、真っ赤なものと彩豊かで、心が浮き立ってくるようだった。百メートルもない河原の至る所に紅葉の絨毯が広がっていた。

私は一度も休まず無事に橋の袂まで辿り着くと、一旦箏を縦にして弾く側を足の甲に乗せた。

ケースに入れていても、できれば衝撃を与えない方が良いので、縦にして置く際は一度自分の足の甲に乗せる。学生時代に部活で先輩から教わり、今では自然と足で受け止める体勢ができた。

仁達の後について土手に繋がる階段を一段ずつ踏み外さないように下りて行った。

「どのへんで弾くの？」

「目立ちにくくかつ汚れにくく座りやすいとこ……あ、あのへん！」

私が指さした先には、川に面した砂利の少ない平坦な場所があった。

仁達はすぐに走って行き、リュックを下ろし、中からまず青いビニールシートを取り出し広げた。

私もシートの上に箏を横向きに置くと、リュックから残りの物を取り出して準備に取り掛かった。

セッティングは二人共黙々とこなし、最後に私が実際の演奏位置を確認しようと正座した時だった。

「あー……緊張してきたなあ」

目の前の穏やかな水の流れとは反対に鼓動が速くなり始めた。

「大丈夫やって」

隣に膝立ちした仁達は手にしたカモフラージュ風呂敷に目をやった。

「このカバーかけるん？」

「うん、雑草の色に紛れるんちゃうかと」

彼は風呂敷をバサリと広げるとそっと箏の上に被せた。

周囲と完全に同化とまではいかないが、ナチュラルな柄と色のおかげで、茶黒い箏一面がポツンと居残り設置されている違和感が、テントのようなアウトドア用品の一部にしか見えなかった。

私はショルダーバッグからスマホを取り出して写真を一枚撮った。

「こんな良い天気やったら紅葉狩り楽しめそやのに」

私は立ち上がってぐっと伸びをした。

一大イベントの緊張感のせいで紅葉を楽しむ余裕はなかった。だからこそ、私は目を見開いてみ広がる自然を眺め一度に記憶に焼き付けることにした。

そうして十分ほど経った頃だろうか、

「来たみたい」

仁達の声とともに川上に注目すると一人の男性がゆっくりと歩いて来ていた。

日向だった。芽乃は一緒ではなかった。

「お誕生日おめでとうございます。琴音さん、龍月」

日向は出会った時と変わらぬ爽やかスマイルでお祝いしてくれたが、私はもう騙されなかった。

笑顔が此奴の標準なのである。私は毅然とした態度を示した。

「龍月は分離したくないってはっきり拒否してました。父への恨みを晴らす目的ならやめてほしいと」

「確かに俺にも同じように言ってましたね。でも、それが彼女の本心だとなぜ信じられるんです？」

「嘘をつく理由があるんですか？」
「彼女が自身の存在に疑問を抱いているのは事実。彼女に罪はなくとも無意識のうちにそう囚われている。可哀想じゃないですか。なのに彼女は先輩やあなたに迷惑をかけまいと分離を拒否しているんですよ」
「それは違います。確信は持てへんけど、龍月はそんな感情を押し殺して生きる子じゃありません。会って話したのはたったの三回だけ。日向さんより龍月のこと知らんと思う。でも、今まで諦めそうになった時に立ち上がる勇気や、落ち込んだ時に立ち直る前向きな気持ちを起こすきっかけを彼女がくれてたんじゃないかって。いつも自分の意思でやってきたことが、実はもう一つの魂が手助けしてくれてる、支えになってくれてるんやろうなって、龍月の存在を知ってから思うようになったんです。当たり前すぎてて今までは全然気にしてなかったけど、うちは彼女と一緒に生きてるんやって。やから彼女はうちの一部であるし、彼女もうちの一部、二人で一人なんです。彼女じゃなきゃ絶対アカン！ってことはないんやろけど、三十年間付き合ってきたんやし、これからもずっと一緒に生きていきたいんです。龍月も同じ気持ちです」
　一切の迷いはなかった。
　いつも見えないところで支えてもらってきた。神の思し召しというのか、彼女は使いなのだから強ち間違いではないはずだ。大病を患わずこの歳まで生きてこられたのはきっと彼女のおかげでもあるだろう。ここまで強い意思を見せたからには相手も退くはずと睨んでいたが、現実はそう上手くはいかなかった。
「そうか……龍月もあなたも裏切るんですね」
「え、うちは裏切るとは言わんような」
「今、二人で一人って言いましたよね？」
「それは言葉のあやっていうか、そもそも私達は裏切ってません。日向さんの思い込みが激しいだけじゃないですか！」
　私は思い切って本音をぶちまけた。が、やはりスパッと言い切るのは勇気を要した。
「……って、龍月も遠まわしに。でも、日向さんのことは好きやから付き合いは続けていきたい。夢逢石を使わん方法があればいいけどって。日向さんもそうなんでしょう？」
「そうですね……計画通りに進めばそう思ってましたよ。こんなにも長い年月がかかっているっていうのに、疑わず信じているなんてバカな奴ですよ。まあ、そのバカのために躍起になっていた俺の方がもっとバカなのかもしれませんけど」
彼はからからと笑った。
「十年もかかったのは解決策が難しかったからなんじゃ？」
「十年もって言うけど、ついででやってたことですから、そりゃ時間はかかりますよ。まあでも、千冨玲様にお願いしたから実質一年くらいで済みましたかね。あの時は誇張表現でした。十年くらいかけといた方がそれっぽい感じがして良いでしょう？ちょうど節目の年に重なったし」
　私は開いた口が塞がらなかった。
「ここまで完璧だったんですよ。龍月に同情したあなたは絶対計画に乗ると思ってたのに。先輩が下

りてきたことで台無しになった。龍月も余計なことを喋りすぎた。石渡さなきゃよかったなあ。全く徒労でしたよ」
「徒労？龍月はあなたのこと信じてたんですよ」
「だから俺も彼女の本当の意志を信じて事に移しただけです。彼女の準備は整っているので、後はお二人の魂を分離させるだけです」
「嫌です！彼女の為って見せかけて、本当は自分の為の行動やろう。そんな人に協力したくない」
「仕方がないな……」
　ぞわぞわと黒い煙のようなものが彼を取り巻き始めた。
　次第に彼の頭上には大きな影ができた。
「これは！？」
「何も分離方法は一つとは限りません。できればこの手段は使いたくありませんでしたが……已むを得ません。この手で直接分離しましょう」
　彼は右腕をすっと前に伸ばした。
　肘から手の平にかけて黒い煙に覆われ、さっと私の頭をめがけて振り下ろそうとした途端、私はとっさに一歩下がるのと同時に右手を強く下から上に振り払った。
「琴音ちゃん！」
「離れてて！」
　背後の仁達に私は振り返らずに避難を促した。
「よくかわしましたね」
　日向は相変わらずにこやかな表情だった。それが余計鼻についた。
「簡単にやられるわけにはいかん」
　こてぃすと防御技、カラリンの効果で直撃は魔逃れたが、指がひりひりする。
　痛みで四年半前の記憶が蘇ってきた。ブランクのせいか相手が強すぎるのか、私は緊迫感に包まれた。
（何とか対策を考えんと持たん！）
　と頭の中はぐるぐるまわるばかりで、一向に良い案が思い浮かばなかった。
　やはり演奏するしかないのか……という考えを見透かしたのか日向は目を細めた。
「言っておきますけど、俺にはこてぃすとの演奏は効きませんよ」
「え？何で」
「力の差、ですよ。それでも良ければ弾く機会は与えましょう」
　お前一体何様やねん！と私は彼の態度にカチンと来た。
「そうだ、どうせなら演奏で勝負しませんか？どちらがより聴き手の心を動かす演奏ができるか。判定は仁達さんに任せます」
「そんなの日向さんに不利なんじゃ……」
「それならあなたには悪くない条件でしょう」
「むむむ……その腐った根性叩き直したる！」

私は後先考えず箏のある方へ猛進した。

職場で利根さんに冷やかされた時の苛立ちに比べたら、腸が煮えくり返った。私は風呂敷をめくり箏の前に座った。

仁達が慌てて駆け寄ってきた。

「挑発に乗ったらあかんって！」

「仁達はうちより向こうを選ぶの？」

「そうじゃなくて……これは罠やって！」

「罠でもこんだけ馬鹿にされたら受けて立つしかないやろ。はじめから弾くつもりやったし、それに他に手段ないんやし」

「そうは言っても……」

心配する仁達を他所に、私は緊張感などそっちのけで『背ワタ』に燃え上がる熱い思い全てを託そう決めた。

演奏体勢が整うと日向もやって来た。箏をはさんで向かい側に座り込んだ。

「いつでもどうぞ」

と告げるとゆっくり瞼を閉じた。

この後の予想はつかないが弾くしかない。私は無言で仁達に頷くと彼は少し後ろに立った。

姿勢を正し、すうと深呼吸した。雑念を取り払い演奏のことだけを考えスッと構えた。

イントロは指で弾く奏法から静かに始まる。メインの盛り上がる部分では、大量にひしめき合う海老と格闘しながら背腸取りに専念する料理人の苦悩を、和音を駆使したスピード感溢れる旋律で表現されている。更に両手を交互に使い、掛け合うように絃を鳴らしていくと、まるで大海原を連想させるかのような壮大な景色が思い浮かべられる。

そしてフィナーレはピチカートや倍音で、キラキラと輝く夜空に心癒される様子が描かれている。

トロリロリン――

最後のアルペジオを弾き終わり、私は静かに音を消した。

平常心を保って演奏できたことにほっと一息ついている場合ではなかった。精神安定の効果があったかどうか日向の状態を確かめた。

目を開けて徐に立ち上がった彼は、パンパンパンとわざとらしく拍手した。

「良い演奏でしたよ……ただ、それだけ」

黒い影が全く消える気配がないことから無駄骨だと悟った。

「では次は俺の番ですね。お箏お借りします」

彼はズボンの左ポケットから箏爪を取り出し、右手指にはめた。

私は悔しさをこらえながら彼と場所を入れ替わった。

彼はごく自然に弾き始めた。耳にしたことのない曲だったが、流麗な指さばきに目が釘付けになった。嫌みたらしい性格からは想像できない程、柔らかさを保ちながら繊細で甘美な響きを奏でた。

思わず聴き入ってしまった私はハッと我に返った。仁達が頭を抱え唸っていた。

「仁達！大丈夫！？」

「ごめん……何だか頭がふわーっとしてきて」
「あ、ちょっと！しっかり！」
　体を起こそうとしてよろめく彼の両肩を私はがしっと掴んだ。
「何をしたんですか？」
　私は日向をキッと睨みつけた。
「ただ演奏しただけですよ。しばらく動けないようにと念じて……彼の心は動かされたでしょう？純粋な人程かかりやすいと言われている術なのでね。あなたはタフなんですね」
　褒めているのか貶しているのか、でもそのタフなおかげで私は術にはかからなかった。
　日向の何食わぬ顔からして標的は最初から仁達に絞っていたのだろう。
（うう、どうしよう……）
　とりあえず私は、仁達に別の場所で休むようにと促した。
「大丈夫やで」
　彼は顔色が悪かったが、心配をかけぬように微笑んだ。
　そうこうしていると日向が立ち上がった。
　「そろそろ終わりにしませんか？」
　不敵の笑みを浮かべた彼が私達に向かって足を踏み出そうとした途端、急に動きがピタリと止まった。
　そして、誰もいないのに腕を後ろに取られ羽交い絞めされているかのようだった。
「くそっ！龍月か！小癪な真似を……！」
　私は何が起きたのかわけが分からず立ち竦んでいると、
「琴音、逃げて……」
「龍月？」
　頭の中に声が響いた。
「演奏はちゃんと効いてる。石が邪魔をしている……取り上げて破壊して……」
　途切れ途切れだが龍月の声だとすぐに分かった。
「わたしが抑えている間に……早く……！！」
「うん！」
　躊躇っている暇はなかった。
「仁達！持ち物検査！」
　私は病み上がりの仁達に遠慮なく指示した。
「はっ？」
「日向さんが夢逢石を隠し持ってるって龍月が言ってるん。それを取り上げて壊すんや！確認して！」
「え、うん、わ、分かった……！」
　仁達は戸惑いながらも彼にそっと近づくと、「し、失礼します」と律儀に挨拶した後、上着のポケットやらズボンのポケットやらをポンポンと触って確かめた。
「あ、あった！」

彼の上着の右胸ポケットから取り出したのは藤紫色の小さな巾着袋だった。
「パス！」
仁達から受け取った巾着袋を私はしっかりと握りしめた。
「さあ、ゼンマイ出番やで！」
私は箏に向かって大声で叫んだ。
「ふぬぬ～う！」
箏からひょこっと顔を出したゼンマイは全速力で駆けて来た。
その顔はやる気に満ち溢れていた。
「放せっ！」
縛りを解いた日向は息を荒げていた。その瞳は赤黒く光っていた。
「石を返してもらいましょうか」
「こんなもん持ってたらポンコツになってしまう。ゼンマイお願い！」
「ふぬぬーっ！」
ゼンマイ出力全開。昨日の三倍速でロング化した爪を武器に彼は超高速で石を割り始めた。
「ぬぬぬぬん」
石砕き職人にも引けを取らぬほど絶好調のゼンマイドリル。
割れ目から這い出てきたクロツブムシを器用に舌で舐め取る。
「やめろ！」
「とりゃっ！」
阻止しようとする日向に私は爪技フルパワーで跳ね返した。
指は滅茶苦茶痛かったが、先程よりも威力が上がっていることを確信した。
「後はもう一回浄化するだけ！」
私は手早くショルダーバッグにゼンマイと巾着袋を入れて走り出した五歩先で足がもつれてこけた。
ドテン！
「わっ！」
「ふぬぬーん！」
反動でバッグからゼンマイと巾着袋が飛び出して地面に落下した。
「ゼンマイ！」
自分の足で躓くなんて無様すぎる。
トホホ……と泣きそうになりながら体を起こした目の前に黒い影が映った。
（しまった！！）
「残念でした。石は返してもらいます。まあ、あなたにしてはよくやりましたよ」
冷徹な笑みを浮かべた日向は再び頭上に手を翳した。
私はパッと右手を上げたが、左手で手首をぐっと掴まれた。クロツブムシの魔力で悪に染まりつつあるのか、それとも本質的な性格が影響しているのか、考えを巡らせる余裕などなかった。
もうダメだと諦めた瞬間、パアッと辺り一面が明るくなった。その眩さに日向は一瞬力を弱めた。

私はパッと手を振りほどきゼンマイを抱えて彼から離れた。
「遅れてごめん！」
前方約二十メートル先に現れたのはメルフィーユだった。
そのすぐ後には芽乃が付いて来ていた。
（遅い！）
少し遅刻どころか大分遅刻やで！と怒りそうになったが、ピンチを救ってくれたことに感謝すべきだと思い改めた。
「思った以上に時間かかってしまって……」
「全くですよ……あれ、どうしたん、仁達？」
仁達はあんぐり口を開けてメルフィーユを眺めていた。
「ああ、そうか。この姿を見るのは初めてだったね」
「そやったな」
私はすっかり忘れていた。
「これが本来の姿やで」
ゆるくまとめた輝く銀髪。碧い瞳。薄いグレーのジャケットを羽織り、インナーには二枚襟シャツにお洒落な結び方をした薄青が鮮やかなグラデーションのネクタイ。インナーは細身のボトムスにカーキグレー色の編み上げハーフブーツという仮の姿と比較するとラフなスタイル。
けれども、一番目を引いたのは背中に生えた大きな白い羽根だった。
天の使いという典型的なイメージに一致し、威厳と優しさを兼ね備えた佇まいに二度目でも見惚れててしまった。
「へえ～、いや、なんというか神々しいオーラ出てるなあ」
「ありがたや～って気持ちになるよなあ」
「何のほほんとしてるの！？」
一喝するメルフィーユに私は謝った。
「すみません……二人が来てくれたから大丈夫かと思って」
「まだ油断できないよ」
すぐ傍には眉をしかめた日向が立っていた。
もはや今の彼は悪の権化と揶揄したいところだったが、まだわずかながらもどこか正常心を残しているふうにも感じ取れた。
メルフィーユは私達を守るようにしてすっと前に出た。
「もう止めるんだ。これ以上石の力を使えば自我を保てなくなるぞ。使いに戻れなくてもいいのか」
「また説教ですか。善人ぶって……芽乃もそんな奴の肩を持つのか？」
「つるすべ肌に悪い人はいない！」
「それなら俺も同じ……」
「あんたはよーく見たら毛穴詰まってんの！黒ずんでるわ。今のあんたの心と同じようにね」
芽乃はびしっと日向の顔を指さした。その気迫に物怖じしてか彼は口を噤んだ。

「日向には悪いけど、ここまではやりすぎよ。逆にこの人達を苦しめてるだけ。あんたもきっと心の奥で苦しんでるんでしょう？十分頑張ったよ。妬みや嫉みなんかじゃ何も解決しないよ。ほら、石を出して。壊してもらうから」

芽乃はさっと日向の前に手を差し出した。

日向は彼女を無言で見つめた後、握り締めていた手を緩め、石入りの巾着袋を彼女に渡した。

「さ、琴音さん、これを……」

「よし、ゼンマイもう一回頼むよ」

袋を受け取った私は中から残りの石を取り出し地面に置いた。

ゼンマイはぴょこっとバッグから飛び出ると「ふぬーぬぬん！」と爪を再度鋭利化させた。

キュイーンとゼンマイドリルが回転し、石を叩き割っていく。這い出てくるクロツブアリをぺろりと舌で器用に掬い取る様子を私達は眺めていた。

最後の一個を処分し終えて、やれやれと安堵の息をつこうとした時だった。

突然ゴオーッ！という凄まじい音とともに地面が揺れ出した。

「地震！？」

ゼンマイを掴んでバッグに戻した私は仁達の腕にしがみついた。

彼はぎゅっと私を引き寄せた。しばらくすると揺れは収まったが、目を開けると黒い影が日向をすっぽり覆っていた。

「このままでは彼が飲み込まれてしまう……！」

「ええっ！？」

「そんな、せっかく石を取り上げられたのに…日向！」

芽乃は彼の元へ走り寄ったが、黒い渦に触れると、

「うわっ！」とすぐさま手を引っ込めた。

「大丈夫ですか！？」

「うん……少しピリピリするだけ」

「近すぎると危険です。離れましょう」

右腕を押さえている芽乃とともに戻ろうとすると、渦から巨大な腕のような影がにゅっと現れた。

「危ない！」

私は芽乃の手を取って低姿勢をとった。

するとパシィン！！と弾くような音がした。

見上げると、羽を広げたメルフィーユが黒い渦を背に立ちガードしてくれていた。

「怪我はない？」

「はい……すみません」

がっくり気を落としている芽乃を横目に私は再び思考を巡らせた。

無闇に突っ込んでも埒があかない。この状況を打破するには……

「……こと」

「！？」

「どうしたの？」
「また、龍月の声が！」
　私は精神を研ぎ澄ませた。
「……もう一度弾くの。そうしたら渦を消し去れる……」
「でも、さっきの曲は……」
「魔虫を彼から引き寄せることができたんだ。あなたの思い入れのある曲で彼を戻すの……」
「思い入れのある曲」
　その刹那、脳裏に『蒲鉾帆立』がよぎった。
　しかし、あの曲はお稽古曲に飽きてきたら弾く箸休め的な曲で、特別弾き込んでいるわけではない。
「大丈夫。わたしも一緒だから……」
　彼女の声はそこでパタリと途絶えた。
（こうなったらやるしかない！）
　私は腹を括った。
「もう一回弾いてみます！どうなるか分からんけど、龍月を信じて」
　私はぐっと右手拳を握りしめた。
「芽乃さんと仁達をお願いします」
　二人をメルフィーユに任せようとすると仁達が口を開いた。
「いや、ぼくは琴音ちゃんに付いて行くよ。見守ることしかできないけど傍にいたいんだ」
「仁達……」
　その純粋な笑顔に心がほわりと温かくなった。
「ありがとう。ほな仕上げにいっちょやるか！」
　腕まくりをした私は大急ぎで箏の元へと向かった。
　調弦を取り直し『蒲鉾帆立』を演奏する準備を整えた。
「暗譜できてるんやね」
「毎日のように弾いてたら覚えるんやって。この曲はちょっと危ういかもしれやんけど」
「心がこもってたら間違っても問題ないよ」
「間違えるのはええんやけど……」
　日向を覆う黒い渦が益々勢力を増し、その範囲が広がっている様子を見て私は不安になった。
（無事に弾ききれるかどうか……こんな心配しても仕方ないな、弾こう！）
　私は気持ちを引き締めた。
　念のため、両手で交互に絃を上から下へ、下から上へ鳴らし、防壁を作った。息を整えると演奏姿勢に入った。
　導入部は絃を右親指ですくって細かく弾くスクイ爪の奏法で始まる。同音をピアノから徐々にフォルテへと大きくしていく。それにならい左手も一音ずつのピチカートでゆるやかな旋律を奏でる。
（この調子……）
　いつもの自分のペースで順調に弾き進んでいた。

ところが、メインに入ったところで次第に視界が暗く靄がかってきた。
（絃が見えへん！）
目を凝らしながら何とか演奏は続けていたが、靄はどんどん深まり、感覚で弾くことすら難しくなり、真っ暗になるとぴたりと演奏が途切れてしまった。
「どうしよう……」
私は両手で顔を覆い狼狽えた。
暗闇の恐怖でがくがくと体が震えた。闇に押しつぶされそうになった時、どこからか仁達の声がした。
「目で見ようと思ったらあかん！心で見るんやよ」
「心で？」
「体で感じ取るんや。家で弾いてる時を思い浮かべて。琴音ちゃんならこんな渦払い除けられる！」
右手に彼の手が重なった。とても温かかった。
私は手を放し反対に彼の手をぎゅっと握りしめた。
そうだ、これは試験ではないのだ。試験は一定のレベルに達しているかどうか見極めるためのテストだから、間違ったり止まったりして減点されるのは仕方ないことで、振るわない成績だったならば努力不足だと諦めがつく。
けれども、本来、演奏に優劣はつけられない。基本は楽譜の通り忠実に演奏できることが重要だが、弾き手によって捉え方が少しでも異なれば表現の仕方も異なるのは当然だ。
それを日向は上手か下手かで無理矢理決着をつけようとしていた。
確かに彼の演奏は上手かったが、心を惑わすだけで心の奥底には響かなかった。それはこてぃすとの本意ではない。人の心に寄り添い笑顔を与える演奏を行うのが私達の役目なのだから。
日向が肝心なことを忘れているとしたら、強い魔の力から彼を引き戻せるのはこの場には私しかいない。
三十路目前にして懐古に浸る日々が多く、何かに熱中する歳でもないと荒みがちだったが、それも箏を止めないのはきっと学生時代の情熱が冷めきっていないからだ。箏を弾くことで輝かしい当時を振り返るだけでなく、若々しい新鮮な気持ちを維持できているのだと思う。
おそらく今後何年、何十年経っても譲れないものの一つとして私の中に在り続けるはずだ。
こてぃすととしては半人前だが、修行経験は私の方がずっと長い。日向にあれだけ小バカにされて「はいそうですか」と素直に引き下がる軟弱者になってたまるか、経験値の差を見せてやる！
滾る思いを胸に私は顔を上げた。
（この闇はまやかし。自分を信じるんや！）
すっと腕を前に出すと、不思議なことに自然といつもと同様に弾き始めることが出来た。
まるで絃に誘導されているかのように迷いなく軽やかに弾き進む。自宅やお稽古場での練習とは響きも全く異なり、弾く度に音が闇に吸い込まれていたのが、だんだんとはっきりと聴こえ、弾き終える頃には闇はすっかり取り払われていた。
私は辺りを見回した。自身の心が洗われるほどに清々しい気持ちだった。

「琴音ちゃん！やったよ！」
　体全体で喜びを表現する仁達とはうってかわって私は「ああ、うん、よかった…」と気の抜けた返事しかできなかった。
　日向はというと、目は覚ましたものの意識朦朧としているようで、地面に座って片足を立てたまま項垂れていた。
　既に芽乃とメルフィーユは日向の元へ向かっていた。私も立ち上がり仁達と一緒に傍まで行った。
「情けないですね。人間にやられるとは」
　日向は自嘲気味に笑った。
「恨み以外にも他に魔を引き寄せる要素があったんだろう。十年もかけるには動機が弱すぎる」
「他にも？」
　私の問いにメルフィーユは日向を見据えた。
「君は使いの気配を感知できない。木曜日に会った時全く僕に気付かなかった」
「それは人間の姿をしていたからで……」
「仮の姿でも僅かに気配は残していたよ。妬ましい奴ならすぐに分かるだろうに。その類の者は天界に稀に存在すると言われている。先天性の特異の一種だと。天界で暮らす使いにとって気配を感知できないのは致命的なことだ」
「……」
　日向は反論せずただ空を見つめていた。
「何気ない一言でも人によっては傷つくこともある……琴音に言われて思い出したんだ。昔、何気なく尋ねたことがあったね。あの頃は確信は持てていなかったけど」
「『気配がわからないの？』でしたね。全て見抜かれているのかと焦りましたよ。あなたは俺の憧れでしたが、同時に畏怖の念も抱いていました。だから弱みを握られてしまったのかと……」
「それがいつの間にか歪んだ方向に変わり、劣等感や嫉妬心により更に闇を増幅させたんだろう」
　黙りこくる日向に
「そうです。そのとおりです」
と芽乃が口を開いた。
「だから、地上へはあたしも一緒に付いてきました。危なっかしいヤツなので、何か問題起こすかも……と。起こしてしまいましたけど」
　彼女は悲しげに視線を落とした。
「芽乃は悪くない」
　日向は立ち上がろうとしたがすぐにその場に崩れ落ちた。
「日向！しっかり！」
　芽乃に支えられながら彼は呟いた。
「十年も費やしてこの様です。彼女は……龍月は始めから分かっていたんでしょう。俺がクロツブムシの魔力に負けることを。ただの魂と侮っていたのが間違いでした。琴音さん、あなたもあの暗闇の中で光を見つけるとはたいしたものですよ」

「音楽は競い合うものじゃないと思うんです。聴く人を和ませたり癒したりできるような心に響く演奏をすることが、こてぃすとであっても大事なはずです」
「惑わされない力を持っていたんですね……」
　彼は胸を押さえて苦痛に顔を歪めた。
「もうこれで良いんです。彼女には迷惑をかけてしまったから」
「何死ぬみたいなこと言ってるの！」
「はは……石使いすぎたみたいだ。頭がぼーっとして……」
　あれだけ憎たらしかった相手だったのに、正気を取り戻し苦しむ姿を目の前にすると哀れに思えてきた。
　何とかして彼を助ける方法はないのかと考え込んでいると仁達が、
「すっとするものでもあればなあ」
　と呟いた時パッと思いついた。
「リリフが効いたりして！」
　突然の私の提案に日向除く三人が一斉に私を凝視した。
「ほら、あれ飲んだら頭すっきりしたって仁達が。効き目あるか分らんけど。あ、でも取りに帰らなあかんか……」
「それならここにあるよ」
　メルフィーユがごそごそとジャケットのポケットから何か取り出して見せた。小さなアルミ袋には「リリフ 1193 試供品二粒入り」と書かれていた。
「それ、いつも持ち歩いてるんですか？」
「宣伝用にね。エコリ様の使い達は皆常備してるよ」
「はあ……」
　私は用意周到な彼に感心した。
「貸してください」
　芽乃がリリフ試供品を受け取ると、袋から一粒取り出して虚ろな表情の日向の顔を上げてサプリを口元へ近づけた。
「これ飲んで」
　日向は左手で粒を取りゆっくりと口の中に入れた。
「しっかり噛むのよ」
　芽乃の言う通りに彼はポリポリと噛み始めた。
　ゴクリと飲み込みんだ三秒後、彼はカッと目を見開き飛び上がった。
「うわ、何だこれ！？すーってしすぎて喉が……げほっげほっ！」
　咳き込む日向の背中をさする芽乃。
「効いたようだね」
「え、これでいいんですか？」
「仁達くんは飲んでどうだった？」

「えっと、爽快感がすごかったですね。心もすっとするくらいに」
「それだよ。日向にも同じことが起きたんだよ」
「早い回復やったな」
　無事に元に戻れたようなのでよしとするかと得心させた。
「良かった……ホントに死ぬかと思ったよぅ」
泣　きじゃくる芽乃に日向は、「ごめん」と短く謝った。
そして私達の方に振り向くとメルフィーユの前へ出て、
「先輩、申し訳ありませんでした」
　深く頭を下げた。
「謝る相手は別にいるんじゃないか」
　やんわりと窘めるとちらりと私を見やった。
　日向はさっと向きを変えた。
「本当にご迷惑をおかけしてすみませんでした」
「うちも龍月も無事やったし気にせんといて下さい」
　腹のうちを明かすと、この数日間の焦燥感、数年ぶりのこてぃすと技および演奏における緊迫感など、かなりの精神的疲労を味わったのだから、すみませんで済むか馬鹿者！と腹に据えかねたが、一人も犠牲者が出ることがなく、本人も反省している様子なのでここは口やかましくなって気まずい雰囲気にしたらまずいと、終わり良ければ総て良しと笑顔で大人の対応をした。
「龍月には見放されてしまったでしょうね」
「そんなことは……」
　ない、と言いかけて途中でやめた。龍月は彼のことをどう思ったのだろうか。
　さっき助けてくれたのも彼女はどんな気持ちで……
（ずっと変わらないよ）
「えっ！？」
　驚いた私に日向が尋ねた。
「どうかしましたか？」
「その、龍月の声が……」
　昨日まではそんなことなかったのにと疑問に感じていると、
（実は前々から意識に入り込むことはできたんだ。確実にではないけど、琴音がわたしに語りかけてくれるようになってから聞こえるようになったんだよ）
　と嬉しそうな口調で答えてくれた。
（そうやったんや……で、ずっと変わらないっていうのは？）
（わたしの気持ちだよ。日向を好きなのは昔も今も一緒ってこと）
　彼女の言葉は温かかった。
（その言葉、日向さんに直接かけてあげられるとええんやけどなあ）
（そうだなあ……琴音の体借りたらできるかも）

（うちの体！？）
（コードを繋げてあなたの意識を一時的にわたしの意識と入れ替えるの）
（そんなのできるん？）
（ここ最近方法を調べてたんだ。禁忌技だし、魔力消耗が激しいみたいだから、ほんの数分しか保てないだろうけど）
　なるほど。熱心に本を読んだり机に向かって書き物をしていたのはそのためでもあったのか。
（うん……分かった）
（じゃあ目を瞑って）
　私は龍月の言う通りに瞼を閉じた。
　一瞬暗くなり、さあっと光が差した明るさで目を開けると、四方は真っ白な壁に囲まれていた。
　体がふわふわするなと思って足元を確認すると、床から三、四十センチの高さで浮いており、その姿が正面の壁に埋め込まれた大きな鏡に映っていた。
　鏡は次第にぐにゃぐにゃと渦巻き状に動き始め、河原の風景を映し出した。目の前には困惑する日向が立っていた。
　とても不可思議な感覚だった。今私の体に意識があるのは龍月なのだ。
　日向は異変に気付いたようだった。
「龍月？」
「うん、少しの間琴音に変わってもらったよ」
「すまなかった。長い間騙していて」
「わたしのほうこそ、魔力が使えること隠していてごめん」
「あれは魔力というよりも､彼女を思う気持ちの表れだろう｡俺は自分のことしか考えていなかった」
「良いんだよ。本当のあなたを知ってるもん。あなたを好きなのはずっと変わらないから。夢逢石がなくなってしまったからしばらくは会えなくなるけど永遠の別れじゃない。きっとまた近いうちに会えるって信じてるよ」
　彼女はそっと彼の手をとった。彼はもう片方の手で零れ落ちそうな涙を拭った。
　すると今度は彼の斜め後ろあたりに視線を向けた。
「お父さん」
　彼女が走り出すと右腕が持ち上げられる感覚がした。
（まさか本当に殴るつもりじゃ……）
「あかーん！」と空間じゅうに響く大声で叫ぶと、じんわりと体全体が暖かくなった。
　彼女は父に殴りかかったのではなく抱き着いたのだった。抱き着かれたメルフィーユは目をぱちくりさせていた。
（何か恥ずかしいなあ……まあ、今はうちじゃないしええか）
　慌てふためくも冷静になり二人の会話を聞くことにした。
　パッと顔を上げた龍月はささっと視線を逸らし、メルフィーユから離れた。
　彼は状況を把握したのか破顔した。

「龍月だね？」
　コクコクと私……龍月は頷いた。
「ごめんなさい」
「どうして謝るの？」
「日向のこと、自分で何とかできると思ってたけど、他の人達にいっぱい迷惑かけてしまったから。怒ってるよね」
　彼女はしょんぼりと俯いた。
「怒ってなんかないよ。琴音を守ってくれてありがとう。あと、こうして出てきてくれたことも」
「そのつもりはなかった……けど、どうしても直接言いたいことがあって」
　龍月はにこりと微笑んだ。
「お父さんは、わたしのこと可哀想って思って自分を責めてるのかもしれないけど、今のわたしは良い魂…琴音に巡り会えて本当に幸せなんだよ。これからも彼女の中で生き続けるから……ずっと見守っていて下さい」
「ありがとう」
　メルフィーユは彼女の頭を優しく撫でた。
「それじゃあそろそろ代わらないと……」
（え！？もっと積もる話があるんじゃないの？）
「もう力が限界。それに本当に心から伝えたいことは、短い言葉で済むものなんだよ」
（ならいいけど……）
「ほら、目を瞑って」
　私は「は、はーい！」と返事をして再び目を閉じた。
　すうっと体の力が抜け瞼を開けると、そこには見慣れた風景と人物たちが在った。
「戻った……」
（ありがとね。あなたともしばらくは話せなくなるけどずっと傍にいるから）
「お礼言うのはこっちやわ。龍月に巡り会えて嬉しかったよ。これからも宜しくな」
「うん」と頷いたような気がして彼女の気配は消えた。
　龍月の思いも本人から届けることができ、それぞれの気持ちが落ち着くと芽乃は日向に尋ねた。
「これからどうするつもり？」
「そうだなあ……先輩も許してくれたことだし、千冨玲様に頼んで……」
　口ごもる彼にメルフィーユは、
「『許す』なんて一言も言った覚えないけど？」
　怒りのこもった口調で笑んだ。
「え、じゃあ……」
　日向が問いかけようとすると、ドドドドド……！！と何かが凄まじい勢いで向かってくる音がした。
　周囲を見渡しても誰もいない。ふと空を見上げると、雲の隙間から地上に下りてくる人影が目に入ってきた。

（えっ？人！？）
　空を駆けているのに、なぜか砂埃らしきものが大量に舞い上がっていた。
　人影は次第に大きくなりそれが男性と判明したとき、既に私達の前まで辿り着いていた。
　男は足を止めるとびしっと仁王立ちになった。
「メルフィーユ様が一番弟子ぃ、清高（きよたか）！只今馳せ参じやしたぁっ！」
「……」
　メルフィーユ除く一同はあっけらかんとした。
　歳は三十代後半くらいか。筋骨隆々、タンクトップに紺色のハーフパンツというスポーツマンの出立ち。天界の者としては如何わしさ満載だった。
「誰？この暑苦しそうな奴」
　芽乃が怪訝そうに問うと清高は、
「暑苦しくはない！情熱に燃えるオトコと言ってください！麗しいお方！」
　声高らかに叫んだ。
「お肌はキレイだけどマッチョは趣味じゃない」
　芽乃はげんなりとしていた。
「ちょうどいいところに来てくれたね、キヨ」
「はいっ！この清高、常にお師匠様のご命令には幾度も確認を怠らず！今回のご計画も粗相がないようにと今のこの時間ぴったりに到着しやしたぁっ！」
「うんうん、良い心がけ」
　メルフィーユは満足げに頷いた。どうやら自称弟子ではなかったようだ。
「では、早速お連れ致します！」
　清高は日向に詰め寄ると、むんずと右腕を掴んだ。
「一体何ですか！？」
　いきなりわけのわからない怪しい男に捕まれて眉をしかめる日向にメルフィーユは言い立てた。
「これから君はまたエコリ様のもとで、リリフ世話係として勤めるんだよ」
「そんな勝手な……」
「千冨玲様にも承諾済みだ」
　メルフィーユは芽乃に目配せすると、彼女はズボンのポケットから紙切れを取り出して見せた。
「これ、千冨玲様から」
　日向はばっと紙を奪い取ると内容を読み上げた。
「常に努めて励むべし　千冨玲より……何だって！？」
「ごめん日向。あたしも一緒に頼みに行ったんだ。あんたのためにもこれが一番良い方法だと思ったんだ」
「それで来るのが遅かったんか」
　神様の手紙内容の意味は深すぎて理解不能だったが、遅れた理由に私は合点がいった。
　謀られたと言わんばかりに歯を食いしばる日向にメルフィーユは、

「一人前として認められるまで、あと最低十年は修行が必要かな。まさか、拒否するなんて言わないよね？」
　にっこりと恐ろしいほどの笑顔だった。
（こえ～）
　私は普段怒らない人がキレるとどうなるかを垣間見たのと同じ悪寒がした。
　それでも、これまでの日向の言動に対して温情ある処置で優しすぎると思えるほどだった。
「分かりましたよ。戻ります」
　日向は嫌々ながらも大人しく諦めた。
「他の仲間もいるから心配しなくて良いよ。ちなみに今後の指導は清高がしてくれるから」
「え？」
「優しい先輩がイチから丁寧に教えてくれるから気軽に聞いたら良いからね」
「ええっ？」
「そういうわけでよろしくお願いしゃすっ！」
　ガッツポーズをとる清高に日向は血の気がさーっと引いていた。
「キヨ頼んだよ」
「お任せ下さい！では善は急げ！ってことで早速行きやしょう！」
　清高はひょいと片手で日向を持ち上げ脇に抱えた。
「な、何を？」
「超マッハで走るんで目を閉じててください！」
「ええ？ぎゃあ～！」
　日向絶叫。清高は猛スピードで元来た道を戻って帰って行った。
「また様子見にいくから」
　二人の姿が見えなくなると芽乃はぼそりと呟いた。
　これで一件落着かと安心すると体中の気が抜けた。
「ふぬぬぬん」
（ゼンマイ、そういえば放置してた）
　バッグの中からひょっこり顔を出したゼンマイは「げふぅ」とゲップをしてコテンと横になって眠り出した。
「ご苦労様」
　私は額を優しくつついた。
「そういえば…！」
　弟を見送った芽乃はにこにこ顔でメルフィーユに尋ねた。
「少々お伺いしますけど、スタイリストってどなたですか？」
「モヨギさんだよ」
「え？マジで！？その人あたしのお師匠なんですよ！超びっくり！今度お師匠に言って担当変わってもらおうかなあ……」

「いや、遠慮しておくよ。慣れてる人の方が良いし、次下りる機会ってそうそうないだろうし」
「そうですか……」
　彼女はしゅんと項垂れたが地面に向かって
「うう～せっかくさり気なくお肌ぺたぺたできるチャンスだったのに！」
　と悔しがっていた。
「さり気なく」なわりに口から全部漏れており、メルフィーユは更に嫌気がさしているようだった。
「まあ、いいや！仁達さんにお願いしたし！記録の件、また来月回収しにいきます」
「は、はい……」
　仁達は勢いで返事した。
「それじゃ、あたしも帰ります。弟がホント色々迷惑かけてすみませんでした。今後は甘やかさずに間違ったことは厳しく指摘できるよう姉として努めます。皆さんお元気で！」
　素早く気持ちを切り替えた彼女は、明るい笑顔ですっと飛び上がると、あっという間に雲の中に隠れてしまった。
（姉弟揃ってぶっ飛んでたなあ。使いにまともな人っておらんのかな…）
　と不思議な余韻に浸っていると、メルフィーユが声をかけた。
「今回も巻き込んでしまってごめんね」
「いえいえ、メフィさんや使いの人達が来たら、きっと何か起こるんやろなって予想してるので大丈夫です。そうでもないと下りてこないでしょうに」
「そうだけど……本来はお祝いの目的だったのに、箏技まで使わせてしまうことになってしまったから」
「今までサボってたツケと思えばどうってことないです」
　私は両手拳をぐっと握り締めて顔の位置まで上げた。
「二十歳過ぎて誕生日迎えても歳とるだけで良いことないなって思ってたけど、この日があるおかげで計画阻止できたんですよね。メフィさんと日向さんが別々に来てたら、うちは今頃抜け殻になってたかもしれません。こう言うのも変ですけど、来てもらってどうもありがとうございました」
　私はぺこりと頭を下げた。
「お礼を言うのは僕の方だよ。龍月を救ってくれてありがとう。君はやっぱり立派なこてぃすと……ううん、弾き手だよ。サボってたって言うけど、四年前に比べて確実に深みのある音色になってたよ」
「そうなんですか…」
　含み笑いをする私に彼は首を傾げた。
「ものすごく今更なんですけど、美貌も知性のカケラもない奴が、見目よい使いの魂と体共有してててえんやろかって思ってしもて」
「要は中身じゃなかったっけ？」
　メルフィーユはクスリと笑った。
「ですよね……」
「冗談だよ。ね、仁達くん？」

「え、あ、うん！琴音ちゃんは美人で賢いよ！」
　このストレートに表現できるところが仁達のニクいところだ。
　実直な彼に断言されたら、もうそうしか思わざるを得なくなってしまったではないか。
　私は苦笑いした。
「ぶっつけ本番で自分でもよくあそこまでやれたなと思います。いつもそんな気がするけど……忘れた頃にやってくるんですよね、予期せぬ災いって」
「日頃の練習の成果やよ」
　間髪を容れず仁達が真面目顔で言った。
「そうかなあ」
「日常の何気ない努力がいざという時に役に立つんやって。毎日のように聴いてるぼくが言うんだから間違いないよ」
「ほとんど寝てるやん」
「……それは、眠たくなるほど心地良いってことで」
「ふーん」
　私の疑いの眼差しに仁達は、
「癒される音色ってことだよ！」
　つまらなくて眠気が襲ってきたのではないということを必死に主張していた。
　それが面白くて私はついつい声を出して笑ってしまった。
「分かってるよ。うちも弾きながら眠たくなる時あるし」
「そっか、じゃあよかった……」
　ホッとしている彼を見て改めて温厚な人だなと感じた。
「あまりいじめちゃだめだよ」
「いじめじゃないです。愛情表現ですよ」
　私はきりっと切り返した。
「いつものことなので」
　仁達はにやけていた。
「そろそろ帰らないと」
　メルフィーユは空を見上げた。
　所々に白い雲がたなびいている。
「また地上に来る予定はあるんですか？」
「特別な用事や非常事態が発生しない限りはないかな」
　そりゃそうか。天界の人が地上界に用もないのに頻繁に訪れても意味ないよなと理解しつつも、別れは寂しくなるものだった。
「仁達くん、琴音のこと宜しくお願いします」
「はい、頑張ります！」
　結婚時に実の父親にも言われたのとほぼ同じセリフに仁達は迷いなく返事した。

頑張りますって何やねん！と突っ込もうかとも思ったが、仁達の真剣な眼差しを見ていたら到底できなかった。
「二人共これからもずっと仲良くね」
「はい！メフィさんもお元気で」
「またね」
彼はくるりと背を向けると羽を広げ空高く飛び上がった。
そしてそのまま天高くのぼり、やがて姿が見えなくなった。
「ふう、終わったな……撤収しよか」
私と仁達は箏や備品を片付け始めた。

箏柱をはずしている最中仁達が、
「琴音ちゃん逞しくなったなあ」
と話しかけた。
「お箏弾いてますっていうの聞いて、清楚とかおしとやかとか先入観すぎたんやろ。わりと体力要るんやで」
「いや、演奏もやけど、ああいうわけわからんものに立ち向かえるなんてすごいよ」
「まあ、あれは勢いみたいな。生死かかってたら必死になるよ。それにうちも無条件にやってやろう！てなるわけじゃないよ。守りたい人、支えてくれる人がいるから強く思えるんやで」
私は仁達をじっと見つめた。彼はほんの少し顔を赤らめて頭を掻いた。
「この先何が起きてもこてぃすと技で対処できるね」
「うちに全部頼る気？」
「違う違う！こてぃすとじゃないと対処できやんこともあるんやろなって」
「そうやなあ……仁達にも迷惑かけてごめんな」
「何言ってるん！夫婦なんやから助け合うのは当たり前やよ。でも、ぼくは何もできやんだけど」
仁達は申し訳なさそうな顔になった。
「ううん。仁達のおかげで『蒲鉾帆立』弾けたんやで。うちなんてまだまだひよっこやのに」
「いいや、琴音ちゃんは着実にパワーアップしてると思うよ。光輝いてたもん」
「ピカー！って？」
「うん、ピカー！って」
「本当に～？」
「……ピカっとくらいやったかも。ごめん。大げさやった」
「まあ、そんなもんやろ」
私は正直な彼をからかうのをやめた。心優しい彼はいじけなかった。
今回の件で自然災害以外の「予期せぬ災い」対策が今後必要だと痛感したが、力を入れ過ぎると空回りするパターンに陥りかねない。
だからこそ無意識のうちに技を繰り出したり、演奏ができるようになる修行が必要なのか。自分で

課題のハードルを上げてしまったが、箏に触れ続けていればこてぃすとの力も衰えないはずだ。
「やっぱり平凡な日常がええなあ」
　備えあれば憂いなし――なんて日頃の備えがあっても完璧な未来予知等できないのだから憂いは尽きない。刺激のない毎日に退屈しかけていたが、寿命の縮まるような思いはもう懲り懲りである。
　多分それは何歳になっても変わらぬ思いだろうし、目新しさを求める以上に今後の自分に合った生き方を歩むべきなのだろう。
「あ、そうや！忘れてた！」
「何？」
　突然大声を上げる彼にビクッとした。
　彼は私に白い歯を見せた。
「誕生日おめでとう！」
「……ありがとう」
　すると絶妙なタイミングでぐおおぉぉ～とお腹が鳴った。
「お腹空いたなあ。もうお昼過ぎてるやん。家に荷物置いたらどこか食べに行こうか」
「帰りはケーキ買うてこ」
「うん、いいよ」
「わーい！」
　私は年甲斐もなく高くジャンプした。
　そして手早く箏をケースに入れて持ち上げると、仁達がビニールシートを外し、リュックの中へ片付けてくれた。
「じゃあ帰ろうか」
「うん」
　私達は一緒に並んで歩き出した。かすかに吹く風が心地良かった。
　相変わらずアンバランスな箏は歩く度に脚にぶつかったが、行き程不快には感じず、むしろ体全体が軽やかで爽快だった。
　散り積もった桜の落葉は陽に照らされ、密やかに煌めきを放っていた。

（完）